

国際文化学部カリキュラムマップ

2017 年 3 月 29 日版

カリキュラムマップについて

- 下記のカリキュラムマップは、学部のそれぞれの科目の到達目標と概要を示し、下記の本学部ディプロマ・ポリシー(DP)4項目とどのように関係しているか示したものです。
- 表の上で、◎=科目と強く関連するもの、○=科目と関連するもの、△=科目とやや関連するもの、を指します。
- DP の関連性については、担当者からのご回答をベースに作成いたしました。担当者の不在等により一部空欄がありますが、ご了解ください。

■ 国際文化学部のディプロマ・ポリシー (DP)

所定の単位の修得により、以下に示す水準に達した学生に対して「学士（国際文化学）」を授与する。

1. 言語（英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語）の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。
2. 異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。
3. 異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の受発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。
4. ICT を駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。

1. 入門科目

科目名	到達目標	科目概要	DP1	DP2	DP3	DP4
国際文化情報学入門	「情報文化」は、「情報」を現代社会の基礎と捉え、情報の生成、編集、再構成と、文化の伝達や人間と情報のかかわりについて学ぶ。「表象文化」は、芸術的創造のプロセスを実践の立場から検証し、さらにそれを「知」の視点から研究する方法を学ぶ。「言語文化」は、国際文化学部生として知っておいて欲しい言語に関する基本的な知識を学び、外国語学習のコツ、基本的なレフェランス類の使い方、大学での外国語の学び方、日々の情報収集法等について考える。「国際社会」は、現代世界の文化的諸問題を国際関係的な視野のなかで考える態度と方法を学ぶ。その際、国際関係における文化や情報の持つ意義を強調して考える。	国際文化学部の学生として身につけてもらいたい基本的な知識を捉え、学生各自が在学中に必要な「文化を学ぶ考え方」を理解するためのオムニバス講義。私たちの学部では文化を「情報文化」「表象文化」「言語文化」「国際社会」の4つの面から捉えようとしており、それぞれの分野を専門とする4人の教員が担当する。	◎	◎	◎	◎
チュートリアル	到達目標には、精神面と技術面の二つの側面がある。精神面については、大学生としての心得を身につけること。つまり、問題点を自分で見つけ、その解決策を考える姿勢を身につける。技術面については、ごく基本的なアカデミックスキルズを身につけること。資料の探索方法・レポートの書き方・プレゼンテーションの仕方などを学ぶ。最終的目標は、まとまったレポートを作成する、あるいはプレゼンテーションを行う力を身につけることである。	高校から大学に移行するための初年時教育であり、大学における勉強とはなにか、がテーマである。			○	◎

2. 基幹科目

科目名	到達目標	科目概要	DP1	DP2	DP3	DP4
< 基幹共通 >						
国際文化情報学の展開	情報文化・表象文化・言語文化・国際社会コースの垣根を超えた、ゲスト講師を含む複数教員によるオムニバス授業で、共通の一つのテーマを巡り、それぞれの専門分野から講義を行います。	<ul style="list-style-type: none"> ・本学部の四つの柱「情報文化」「表象文化」「言語文化」「国際社会」にまたがった、広い視座を得ること。 ・SA、ゼミ活動、卒業論文・卒業制作にむけて、幅広い視点からのヒントを得ること。 ・学生それぞれが社会を構成する一当事者として、理想の人間社会のあり方について多角的に考察すること。 		◎		
< 情報文化系 >						
デジタル情報学概論	<p>デジタルとは何かについて理解する。</p> <p>デジタル情報を用いた様々な要素技術について理解する。</p> <p>デジタル情報化社会及び、それを支えるデジタル技術全体を広く正しく理解する。</p> <p>現代の情報化社会に対する明快な理解と広い視野形成を得る。</p>	<p>ITを過大評価しても過小評価してもいけない。ムードに流されることがなく、正しく理解することが重要である。</p> <p>デジタル情報化社会、それを支えるデジタル技術全体を広く正しく理解するために、文科系の学生、情報学に関心を持つ人を対象に、広い視野のもとにITの本質を明確にし、わかりやすく述べる。</p> <p>この科目は本学部で展開する情報科目ならびに情報デザイン・メディア表現科目群の関連専攻科目の根幹であり、受講者が現代の情報化社会に対する明快な理解と広い視野形成を得ることをめざす。</p>				◎
統計処理法	<p>基本統計量（平均、分散、相関等）の算出方法を理解する。</p> <p>データの可視化（グラフ化）の方法を身につける。</p> <p>データを解釈する方法を身につける</p>	我々は、新聞、テレビ、インターネットなどを通して情報・データに日々接しています。これらの、大量で多様な情報の中から、必要なものを抽出し、適切な解釈を与えることは決して容易なことではありません。統計学は情報を数値化し、客観的に分析・評価することで、本質を捉えようとするための方法論です。この科目ではそのような統計学の基本的な考え方について学んでいきます。具体的には、情報を数値化する方法、数値を可視化する方法、数値を最終				◎

		的に評価・解釈する方法等を習得していきます。				
システム論	自らがまたは社会が直面する問題に対して、何が問題の本質であるか、複数の要素が絡む場合は要素間の因果関係はどうか、どのようにすれば問題を解決できるか、「多くの視点」から、試行錯誤しつつ自分なりの答えを「論理的に」導けるようになる。	私たちは、いくつもの「システム」に囲まれながら24時間生活しているといっても過言ではありません。コンビニエンスストア、鉄道、授業のカリキュラム、これらはすべてある目的を達成するために作られた「システム」です。将来このようなシステムの開発・導入に携わる学生もいることでしょう。その際、「システム」とは何であるかの深い洞察なしには要求に適うシステムを開発することはできないでしょう。 また、人が作るシステムだけではなく、それを作り出す人間の社会そのものも、実は一種のシステムです。いったいどのようなシステムであるかがわかれば、世の中の複雑な出来事も予測でき、より良い社会を実現できるかもしれませんが、実際にはどうでしょうか。本講義を通じて、履修者は身近な題材を元に、どのようにして世の中の複雑な現象が生じるのかを、多くの視点から考えます。		◎	◎	◎
情報倫理学	(1)「文化情報の倫理学」と「コンピュータ倫理学」との違いを身につけ、地球的な規模で「文化情報」や「社会情報」の観点から、「情報テクノロジー」について考える力を身につけることができる。 (2)「情報」概念が、コンピュータやネットワーク上の「デジタルデータ」だけでなく、生命の「遺伝子情報」や、「個人情報」などを含む社会的な「意味」をもつことを説明できる。 (3)グローバル（地球）化した情報空間の中で、「情報」や「メディア」を扱う道徳や倫理のあり方について説明できる。 (4)「情報倫理」に関する批判的な思考を身につけることができる。	本科目のテーマは、「文化情報」という観点から道徳や倫理を捉え、新しい「文化情報の倫理学」を構築することである。一般的に、「情報倫理学」として理解されているのは、コンピュータの使用者のモラルや、サーバー管理者の職業倫理などを含む「コンピュータ倫理学」である。しかし、本科目は、単なる「情報通信技術（ICT）」の規範を議論する「コンピュータ倫理学」ではない。 本科目がめざしているのは、「情報」を「文化情報」や「社会情報」として捉える視点を獲得し、グローバル（地球的規模）に広がる「ニヒリズムの文化」に対抗するための倫理を学ぶことにある。グローバル化する情報空間やメディアに関する問題から、生命操作における「遺伝子情報」に関する問題に至るまで、倫理的思考の実践を学ぶ。		◎	◎	◎

		<p>2017年度はアーサー・クローカー『技術への意志とニヒリズムの文化——21世紀のハイデガー、ニーチェ、マルクス』（Arthur Kroker, <i>The Will to Technology and The Power of Nihilism</i>, 2004）を取り上げ、現代の政治・文化の活力源となっている「技術への意志」の蔓延と、グローバル（地球的規模）な文化政治の支配的傾向としての「トランスジェニック決定論」を検討する。しかも、こうした「ニヒリズムの文化」の時代に対抗する、ニューメディア・アートの可能性についても考察する。</p> <p>もちろん本科目は、教職科目として位置づけられているが、「情報」教免取得という狭い視野に囚われず、広く「グローバル（地球）化する世界の中において、文化情報としての情報学とは何か」また、「地球を基盤として共存する、多様な文化世界を生きる人たちに向けて、文化の情報学を教えるということはどういうことか」という問題に至るまで考えることができる。</p>				
情報産業論	<ul style="list-style-type: none"> ・アナログからデジタルに移行した TV メディアの変遷の理解 ・インターネットの進展に伴う IT 産業の現状理解 ・放送と通信が融合しつつあるサービスの現状理解 ・放送メディアが目指しているサービスの理解 ・IoTをはじめとする様々な情報のデジタル化によるあらたな展開の理解 ・今の時代に求められるメディアリテラシーについての理解 ・各種マスメディアの今後の展望についての理解 ・国内外のメディア動向の理解 ・国が進める施策の理解 	<p>情報産業の現状と展望 ～国内外の放送サービスを通して今を見つめ、将来を展望する～</p> <p>「情報産業」とは、収集、蓄積された情報をもとに、整理、加工、そして思考し、その結果を伝達、流通させる産業である。インターネットや関連機器の進展により、情報の伝達、流通を技術的に支える I T 産業が飛躍的に発展し、情報産業が担う領域は益々広がっている。今や技術の進展なしに情報産業の発展はないといえる。しかし、情報を伝える手段が変わっても、情報の本質は不変である。メディアの仕掛けに惑わされることなく、本物の情報を見分ける能力の獲得=デジタルリテラシーの育成が重要である。本授業では、国内外の放送コンテンツの提供サービスを題材にしながら、伝送路</p>	◎	◎	◎	

		(放送、通信)をキーワードに、情報産業を俯瞰し、各種メディアサービスの現状を把握し、その将来を展望する。インターネット環境を基盤にした、スマート端末に代表される、よりパーソナルな通信メディアの進展と物との繋がりが広がるIoTともに、従来型のマスメディアである放送、新聞、雑誌の「ありよう」がどうなるのか？ それらのメディアを展望するのも本授業のテーマとする。				
ネット文化論	日々変化をするネット社会のなかで合理的な行動を行うために、自らにとって重要な情報の選択基準を持続的に構築する考え方の習得を目標とします。また、講義で扱われるネット社会の事例に対し、受講者自らの意見を論理的に説明することや課題を設定し解決案を検討することも目標とします。	<p>インターネットが発展し、我々の生活スタイルは大きく変化しています。これを「ネット社会」と呼びます。ネット社会の特性とその本質を理解することは、現代社会の動向に対して主体的に活動するために重要です。</p> <p>本講義では通信ネットワークやコンピュータ、携帯電話を基盤とするインターネットの仕組みや歴史、その特性について扱います。また、ネット社会における、価値観、経済活動、合意形成、それを支える情報システムの重要性、知的財産権、プライバシー、倫理、技術について講義します。こうした内容の理解を通じ、ネット社会を構築する文化についての多面的な思考を深めていきたいと思えます。</p> <p>本講義が対象とする領域は、極めて変化が激しいものです。社会的・技術的な課題も日々発生します。こうした課題に対する正解は必ずしも存在するわけではありません。したがって本講義は単なる知識の獲得のみを目的としません。社会で生じている事象の本質を捉え、自らの視点で解釈し、日常活動に対する思慮を深めることを主な目的とします。</p>		◎	◎	◎
<表象文化系>						
表象文化概論	この講義は、「国際文化情報学入門」の「表象文化コース」の次段階となる。この講義を聴いたうえで、または聴きつつ、表象文化コースの各専門科目でさらに	「表象文化」とは芸術諸ジャンルを指す総称である。文学、美術、演劇、音楽、映像芸術、漫画などの作品群を研究の対象とし、その表現手法、歴史的変遷などを辿りながら、それらが内包している意		◎		△

	踏み込んだ研究をすることが望ましい。表象文化に関する全般的な知識を身につけた上で、各自の関心のある領域で専門研究が進められるようにする。	味、欲望、人々に与える影響などを解き明かしてゆくことを目指すのが、「表象文化論」である。ここでは、4つの分野を扱いつつ、表象文化論の基礎教養を履修者に身につけてもらうことになる。				
メディアと情報	<p>3点を目標とする。</p> <p>1) メディアを介したコミュニケーションのメカニズム、メディアのはたらきを自覚する。</p> <p>2) 環境の監視、事業や制度の運営、文化の共有など、社会においてさまざまな目的のために行われるメディア・コミュニケーションの必要性和問題性の両面を学習する。</p> <p>3) メディア・リテラシーの視点を身につけ、メディアと情報のもたらす現象について客観的な評価を行えるようにする。併せて、あらゆる社会的活動に不可欠となる他者からの理解と支持を得るための情報発信（＝パブリック・リレーションズ）の視点を持てるようにする。</p>	<p>現代社会におけるコミュニケーションを成り立たせるメディアと情報の特性とはたらきをさまざまな分野の考察を通して理解し、生活者として、また社会や市場への幅広い発信に携わる職業人として、メディアに対する姿勢とその活用の基礎を習得する。</p>	○	◎	◎	◎
社会と美術	<p>美術史入門・社会と美術・メディアと美術・美術の現場という4つのテーマで講義を進めます。美術史入門では、この科目を学ぶ上での基礎となる近現代の美術史について学びます。社会と美術では、アーティストの制作の現場をめぐる講義です。アーティスト達はどうのようにアイディアを展開し作品が作られていくのか、その過程を探ります。また実際に発表された作品をめぐる社会的な問題について多角的に分析します。メディアと美術では、社会や時代を映す鏡としてのアートとメディアの関係について、具体例を交えながら</p>	<p>現代美術や音楽、建築などのユニークで多様な表現の世界について体験的に学びます。</p> <p>これまであまり接したことのない作品世界に関して、そのものの見方や考え方に触れるきっかけとなる入門的な内容の講義です。</p>	◎	○		

	学びます美術の現場では、役割が分化・多様化する美術館や国際展や、オルタナティブなアートの現場について考察します。				
メディアと社会	授業では、メディアと社会に関する身近な事例を紹介していきます。身近な問題から普遍的、社会的な課題を見いだすことがこの講義の目標となります。毎回の授業ではリアクションペーパーを書くことになります。また授業中の質問も歓迎しますので、みなさんの率直な意見や考えを述べてください。	私たちはメディアを通じて個人や社会とつながりを持つことができます。一方でこれらのつながりの過程で引き起こされる様々な問題もあり、多様化したメディアについて、よりいっそう理解を深める必要があります。メディアが社会のなかでどのような役割を担っているのか、将来メディアはどのようなようになるべきなのか、映像資料などの具体例を交えて読み解いていきます。	◎	○	
<言語文化系>					
言語文化概論	1) テキストや資料の誠実な読みにもとづき、思想家たちの思想的背景や問題意識を捉え、その理論と基本概念を理解する。 2) 言語（ことば）と文化・社会との密接なかかわりについて「意味」「身体」「権力」「テクノロジー」等の観点から検討し、理解を深める。 3) 学んだ理論を手がかりに、現代社会とそこに生きる自らのあり方についての問題意識をはぐくみ、自らのことばで表現・伝達する。	20世紀以降さまざまな領域で展開された、言語（ことば）を手がかりとして文化や社会、そこに生きる人間のあり方を捉え直そうとした学問的営み（理論・概念）について学び、現代に生きるわれわれが世界をどう見つめ、向き合うかを考える。	△	◎	○
比較文化	学生が「文化とは何か？」という問に対する、歴史的な議論の流れを理解し、先行研究を踏まえた上で、文化を比較することの意味を理解できるようになること。フランス学派やアメリカ学派などの具体的な比較文化的方法論を身につけ、漠然とした日本と西欧の比較ではなく、アカデミックな意味での文化比較とは何	学生は日本の近代文学作品の英訳あるいは、日本人および欧米人による日本文化論などをテキストとして読みながら、日本人の発想と欧米人の発想の相違を比較文化論的に考察する。文学作品をテキストとして用いることも多いが、文学研究そのものの授業ではないから、学生はもっと大きな比較文化的考察と発見を目指し、最終的には文化とは何かについて考える。	○	◎	△

	かを認識できるようになることを目指す。				
現代思想	<p>(1) エスポジトの政治哲学を検討することによって、私たちの生命が国家や資本主義によって収奪されている現実を把握し直すことができると同時に、国家権力や資本主義から自らの生(bios)を取り戻すための抵抗の戦略を「哲学的に考えること(philosophical thinking)」ができる。</p> <p>(2) 本当の「哲学の問い」を探り、その問いに答える努力のなかで、生き方をもう一度捉え直し、自分が何をなすべきかを、ひとり一人考える力を身につけていくことができるようになる。</p>	<p>本講義は「現代思想(contemporary thought)」という名称だが、単に「現代の流行の思想」を学ぶだけではない。「現代=同時代」という時代のなかで起こる出来事や物事の「起源」や「本質」について「哲学的に考えること(philosophical thinking)」、それが「現代思想」という科目の課題である。</p> <p>特に2017年度は、「イタリア現代思想:ロベルト・エスポジトの政治哲学」というテーマで、現代イタリアの政治哲学者ロベルト・エスポジト(Roberto Esposito, 1950-)の政治哲学を取り上げ、共同体(community)・免疫(immunity)・生政治(biopolitics)という問題を検討する。</p> <p>本科目は、前期科目「文化情報の哲学」と密接に関連している。履修する学年に制約があるが、積極的に「文化情報の哲学」を受講することが望ましい。</p>	◎	◎	
ジェンダー論	<p>1. ジェンダー研究における基礎的概念を理解できるようになる。</p> <p>2. 言説分析の基本的な方法論を習得し、ジェンダーに関連する諸問題について、基礎的な言説分析ができるようになる。</p>	<p>多様性に富むグローバルな文化・社会を理解する上で、ジェンダーは重要な視点の一つです。この授業では、文化的・社会的な性の有り様としてのジェンダーが、歴史的にどのように構築されまた変化してきたかを、言説という概念を軸に考えていきます。そこから、自文化ならびに異文化について、ジェンダーの視点を通じて、より多角的な分析と理解ができるようになることを目指します。</p>	◎	○	
異文化間コミュニケーション	<p>異なった文化を背景にひきずった個人同士が出会い、互いに理解しあえる関係を築く、というのが、外国人との交流なり異文化間コミュニケーションに対してみなさんが抱くイメージなのではないかと思う。</p>	<p>異文化間の具体的な問題として、どういったことが起こるかを事例を通じて知ったうえで、自分がそういう場に遭遇した場合に、適切に対処し、問題を最小限に食い止め、可能であれば「相手」とのinteraction 相互作用を通じて関係を改善できるという能力を養う。</p>	◎	◎	

	<p>異文化を理解するのは、口で言うほど容易ではない。</p> <p>異文化者が出会ったとき、それぞれの背景の文化が異なることが原因でどういふこと起こってくるのか。最悪のコミュニケーション・ブレイクに陥らないためには、どうしたらいいのか。自らの体験に基づきながら事例を紹介している直塚玲子の著作をテキストにして、異文化（間）が抱える諸問題に触れていきたい。</p>					
Philosophy of the Public Sphere	<p>This course provides a broad introduction to philosophical ways of thinking. The course is open to students from any disciplines, who hope to:</p> <p>(1) understand some of the most fundamental philosophical topics (which include freedom, truth, and moral rightness /wrongness),</p> <p>(2) be able to explain the issues in very simple everyday terms, and</p> <p>(3) apply philosophical ways of thinking (reasoning) on every-day issues.</p>	<p>People often think that “philosophy” is quite an old topic or issue and— very <i>difficult</i>, unfortunately. It is true that philosophical questions have been discussed in rather complicated and often confusing ways by philosophers since many years ago, for example, by Aristotle in the ancient Greek period. But these questions are relevant to our everyday life. We are surrounded by a number of <i>philosophical</i> issues, though we may not always look into their philosophical significances; philosophical issues <i>are</i> basically our everyday issues. But what relevance? How are they related to our life? In this course, you will discuss various philosophical topics, their in-depth meanings, and their philosophical significances, attempting to find their very relevance to your life. That may help you see your environment, your society and the world in quite an exciting and interesting way. During the course, we will discuss about 14 philosophically important topics in class.</p>	◎	◎	◎	△
< 国際社会系 >						
国際関係学概論Ⅰ・Ⅱ	<p>① 国際関係の構造、動態これをめぐる概念、理論の特徴と変化を、国際関係の歴史のなかで学ぶ。</p>	<p>国際関係学が対象とする国際関係の構造と動態を、行為体（actor）の多様化、諸行為体同士の関係の変化から理解し、また各時代の国</p>		◎	◎	

	<p>②複雑に絡み合った現代国際関係の事象、問題を、それが生み出された歴史的過程（通時的視点）、同時代に起きているほかの問題や事象との関係性（共時的視点）を踏まえて分析することを学ぶ。</p> <p>③①、②を通じて広領域学としての国際関係学の方法論を学び、国際文化情報学に向かう基礎的な視座と方法への理解につなげる。</p>	<p>際関係認識や分析を知ることを通じて、国際関係学の視点と方法を学ぶ。取り扱う対象時期は、Ⅰが近代国際関係の成立から第二次世界大戦まで、Ⅱは第二次世界大戦後から現在までとするが、つねに現代国際関係との関連を意識した分析を行う。</p>				
国家と民族	<p>① 「宗教と国家統合／非統合」という観点から授業を行う。</p> <p>② 国民国家統合における宗教の役割を統合へのドライブという側面と、かえって非統合を促進する側面を検討する。</p> <p>③ 日本、インドネシア、アメリカの3国を、国家神道、イスラーム、キリスト教という（擬似）国教の役割を比較検討する。</p>	<p>「日本人は無宗教」という言説の根源を批判し、天皇制と国家神道との関連性を、インドネシア、アメリカでの宗教の国家統合非統合における位置づけを比較検討する。</p>		○	◎	○
平和学	<p>（１）消極的平和、積極的平和、文化的平和の概念を使って実例を説明できる。</p> <p>（２）自らの研究テーマや関心のある専門領域を平和学の視点から捉えることができる。</p> <p>（３）平和学で取り上げられる方法を理解し実例に適用できる。</p>	<p>本授業では主に国際機構に着目して平和学を学ぶ。歴史、思想、組織、制度などを通して平和や暴力について考え、国際社会コースの基幹科目として、各自がより深めたい専門領域を見つけるきっかけとなることを目指す。</p>	○	◎	◎	○
宗教と社会	<p>１．宗教と社会の関係を考えるために必要な、基本的な概念や理論を理解できるようになる。</p> <p>２．宗教と社会の関係について、基本的な分析概念や理論を用いて、基礎的な事例分析ができるようになる。</p>	<p>異文化理解において、宗教は重要な要素の一つです。この授業では、宗教というレンズを通して、過去そして現在における社会の諸問題を検討していきます。宗教と社会の関係を、格差・開発・ジェンダー・ナショナリズム・国民国家・消費・紛争などの問題から捉えることで、グローバル化の進む現代社会における多様な価値観との共生のあり方について考えていきます。</p>		◎	○	
Religion and Society	Students will:	Students will learn anthropological approaches to thinking about various		◎	○	

	<ul style="list-style-type: none"> - Understand basic anthropological approaches to religion and relativize their conceptions of religion, humanity, and society. - Learn about comparative perspectives and the difficulties of translating and comparing concepts such as religion across different languages and societies. - Develop critical reading and discussion skills in English and gain new perspectives on their own belief systems. 	issues regarding religions and societies. Rather than focusing on theological discussions, details of religious teachings, or categories of religions, this course will explore the everyday experiences and understandings of the spiritual, the sacred, the mysterious, or the unexplainable. After building a foundation of anthropological thinking, students will examine religions in relation to symbolism, boundaries, politics, and personhood in different societies.				
国際文化協力	<p>(1) 国際文化論および国際協力についての基礎的な知識を身につけること</p> <p>(2) 国際協力と文化を結びつけて論理的に事象を分析できること</p> <p>(3) 「技術と文化」「開発コミュニケーション」「文化遺産保護」「難民」「パブリックディプロマシー」などに授業で扱うテーマについて説明できること</p> <p>(4) 関連する文献の趣旨を的確に読み取れること</p>	<p>この授業では国際文化論の観点から国際協力の基礎を学ぶものである。具体的には国際協力の歴史や仕組み、国際協力が文化に及ぼす影響、文化面の国際協力のあり方について知識を習得するとともに、それらを用いて論理的に考える力を養うことを目的とする。</p> <p>1, 2年生には、専攻科目や演習として更に深めたい学問領域やテーマにつなげる機会にして欲しい。</p>	○	◎	◎	○
異文化適応論	<p>しつけや教育の仕方、あるいは教育システムといったものが、いかにその社会で適応的に生きる人々、つまりその社会にあった行動パターンや感情の働き方を身につけた人々を育てるために作り上げられてきたものであるかを、授業で扱う様々なテーマを通して理解する。</p>	<p>国際社会で生きるとき、われわれは様々な文化的背景を持つ人々との相互理解を通して責任のある判断と行動を期待される。ところが、異文化間理解ということを考えるとき、われわれは異文化に見られる行動様式や思想を理解することが国際社会における他者理解のすべてであると考え傾向にあるように思われる。では、心の働きは文化と関係のない普遍的なものなのだろうか。本講義では、文化心理学における比較文化的実証研究を取り上げながら、心の働きと文化の関連性について学んでいくとともに、世界という視点で捉えたとき、われわれが普段普遍的と考えている人間観、発達観、家族観、そしてそれらと深い関わりを持つ心理的機能がいかに特殊な文化に根ざしたものであるかを解</p>		◎	○	

		<p>説していく。また、講義で扱う 様々なトピックを通して、異文化 社会における適応とはどういうこ となのかを併せて考えていく。</p>				
--	--	---	--	--	--	--

3. 情報科目

<情報科目>

科目名	到達目標	科目概要	DP1	DP2	DP3	DP4
情報システム 概論	コンピュータを構成しているハードウェアおよびソフトウェアについて動作や機能を学習する。情報セキュリティを含む、情報科学の基礎的な知識を習得する。	「IT パスポート」や「基本情報処理技術者試験」の資格試験の範囲の一部を念頭に、情報処理システム全般に係る基本的な知識および技能を習得する。			△	◎
メディア情報 基礎	PC マルチメディアの基礎知識の習得から始め、画像処理、映像制作の代表的なソフトを備えた実習設備を十分に活用しながら作品制作を行う。これにより、インターネット環境において文化情報を発信できる能力を身につけることができる。	本講義は、メディアとしてのコンピュータに着目する。「情報リテラシーⅠ」「情報リテラシーⅡ」では、コンピュータシステムの基本的構造とパーソナル・コンピューティングを利用した文化情報の生産・編集・プレゼンテーションの基本を習得した。本講義では、これらに引き続き、文化情報の発信・加工・編集のための基本技法の習得に力点を置く。 そもそもデジタルとは何かをやさしく読み解くことから始めながら、メディア情報の文化史、メディア情報をデジタルに扱うためのしくみと基本技法、ディジタルカメラ、スキャナ、ビデオなどメディア機器の活用法、PCを用いた簡単なマルチメディア・コンテンツの制作、HTML とスタイルシートによる Web コンテンツの構造化とデザイン要素の取り扱いなどを取り上げ、マルチメディアを活用した文化情報の発信・加工・編集のための基礎事項を習得するとともに、コンピュータを用いた作品実習を通じてメディアとしてのコンピュータを駆使するための実践的なスキルを育成する。				◎
ネットワーク 基礎	インターネットの通信とサービスの仕組みの基礎知識を習得しビデオ会議やソーシャルメディアなどインターネット環境での情報サービスの活用法を学び、同時に正しい使いこなしのためのセキュリティ知識を身につける。特にSAの学習記録	ネットワークは絶えず変化しており、世界中どこに行っても安全確実にコミュニケーションできることは、実は思うほど簡単ではない。本講義では、コンピュータとネットワークをコミュニケーションの基盤ととらえ、ネットワークとコンピュータを用いた共同作業やインターネットにおける情報交				◎

	や SA 帰国報告には ePortfolio を活用するので、海外でのインターネットの利用と ePortfolio 活用のスキルを身につけて欲しい。	換・情報共有の仕組みを、WWW、メール、ビデオ会議、グループウェアなど先端のコミュニケーションツールの基本概念とその実現例を通して学ぶ。これらのネットワーク技術の使いこなしは、まずスタディ・アブロード (SA) において、次にゼミと就職活動において必要となり、ひいては卒業後のグローバルな社会でのサバイバル・スキルとなろう。ネットワーク・コミュニケーションこそが知的都市型社会の特質である。 。本科目の履修とリテラシ関連科目での既習知識を総合することで、IT パスポート等にむけての知識習得を目指し、さらにネットワーク関連の上位科目に結びつける。				
情報システム 応用	情報システムの構成および処理形態を学び、情報システムの開発および運用・保守に必要な基本的知識と技能を学習する。	上記資格試験内容の理解の深化を目指すと共に、情報システムを安全に使用するための工夫や応用を学習する。			△	△
ネットワーク 応用	CSS3、HTML5 という Web テクノロジーの最新の技法を学び、スマートフォンやタブレットなど携帯機器への表示にも役立つ JavaScript ライブラリの活用法を身につける。	今日の Web において注目すべき要素とは、スマートホンやタブレット端末における動的なコンテンツと対話性の提供といえるだろう。従来は CSS と JavaScript によって実現されてきた諸機能が、jQuery などパッケージで携帯 Web の中心技術として注目されている。本講義では「ネットワーク基礎」において習得した Web サービスの知識をもとに、インターネット環境における Web 制作の技法を学習する。とくにダイナミック HTML を実現するための JavaScript と jQuery の技法について学ぶ。				◎
メディア表現 法	Photoshop の応用技法を習得し、デザイン、配色の基礎を修得し、PC 上の画像処理とデジカメ、プリンタ等の周辺機器との関係を理解することで、デジタルマルチメディアの特性を活かした中級以上の作品制作ができるようになる。	PC を使ったマルチメディア制作とデザインの基礎を講義と実習を交えて学習する。とくにコンピュータ上でのメディアデータの特性とコンピュータによる画像処理、図形処理について表現・変換などの知識を身につける。Photoshop を基本ツールとして画像レタッチの諸技法を学ぶ。自ら写真を撮影し、いくつもの課題制作に取り組む。見やすい作品づくりを目指し				◎

		て、配置、コントラスト、整列などデザインの基礎知識を習得し、実習作品の表現に応用する。これらを通じて情報メディアの活用とメディアデータの処理技法を学習し、さらにノンデザイナーである我々が、Web やパッケージメディアの視覚面をどのように活かすことができるかも学びたい。セメスタ中の課題をクラス全体で合評することでお互いの作品の良いところを学び、質の高い制作を目指そう。				
プログラミング言語基礎	情報システムを構築する上で必要なプログラミングに関する基本的な事項を学び、簡単なプログラムを作成する能力を修得する。	プログラムを作成する上で必要となる、変数、演算子、関数等の基本的な構文を理解し、簡単なプログラムを実装することで理解を深める。				◎
仮想世界研究	仮想世界の次のような側面にたいして基本用語を用いて言及できるようになる。 a. 仮想世界の受容、ネットで生き易いのはなぜか、 b. 仮想世界における「わたし」とアイデンティティ、 c. 「仮想現実」の考え方と理論、 d. 「仮想現実」の要素技術と、社会のさまざまな側面への浸透、 e. 変容する社会これらに切り込むための基本的な考え方と洞察力を身につけることができる。	社会に表面化する重要主題として「仮想世界」の問題を取り上げる。 メディアテクノロジーの進展によって、現実と仮想との境界は曖昧なものとなった。その一方で私たちの生活は、”手ごたえ”＝リアリティ（現実感）を喪失しつつある、と指摘される。いったい仮想世界が浸透することによって、私たちの日常生活がどのように『変化』し、何が『拡張』した、と言うのだろうか。その現在進行形の変化を、受講生と協同作業しながら具体的に検討を加え、問い直していく。		◎	◎	◎
データベース基礎	関係データベースの基本概念を理解する。データベース管理システムを利用できる技能、およびデータベースを設計できる技能を身につける。	情報化社会においてデータベースは欠くことのできない技術です。本授業では、世の中で広く利用されている関係データベースの概念および理論について学び、演習を通してデータの検索やデータベースの設計を行う技能を身につけます。				◎
社会とデータサイエンス	IoTやビッグデータに関連して、デジタルデータの生成・取得や利活用の範囲、取扱い扱い方、可視化等を学び、伝え方を実践する。	データサイエンスの事例を通して、情報の生成や価値を議論し、データを正しく扱うための基本的な統計学や可視化手法を学ぶ。		△	○	△
道具による感覚・体験のデザイン	情報化社会においてデータベースは欠くことのできない技術です。本授業では、	体験 experience とは何なのか、今日ほど注目される時代はない。そ		◎	○	◎

	<p>世の中で広く利用されている関係データベースの概念および理論について学び、演習を通してデータの検索やデータベースの設計を行う技能を身につけます。</p>	<p>の一方で、「経験の危機」も指摘される。</p> <p>仮想世界の浸透も手伝って、私たちの「体験」の様式はかつてない速度で変化し、どこまでが体験なのか、その境界はますます曖昧になりつつある。自分の身体感覚を使って体験していない出来事もあたかも体験したかのように受け入れる不思議さを再吟味する。</p> <p>今年度は、「空間の体験」を取り上げる。空間をデザインし直すと、そこでの体験はどのように変化するのか。ここでいう空間は、幾何学的空間でも装飾的空間でもない。「生きられる空間」である。</p>				
--	--	--	--	--	--	--

4. 言語科目

科目名	到達目標	科目概要	DP1	DP2	DP3	DP4
世界の言語 I	1. 印欧語の全体像を把握する。 2. 印欧語の歴史を知る。 3. 印欧語研究の方法や背景を知る。 4. 他の言語と印欧語の関係を知る。 5. 言語の歴史・構造について、知識を深める。	印欧語について考察。全ての大陸で話されている印欧語がどのようにしてできたのか、どのように変化してきたのか、特徴はどのようなものか、世界の言語の中でどのような位置にあるのかを知る。	◎	◎		
世界の言語 II	言語について公平な視点をもてるようになること（一例をあげれば「日本語は非論理的、英語は論理的」のような俗説に惑わされないようになること）。そして学習言語と日本語をさまざまな側面から対照できる力をつけること。	アジアの言語を中心に、言語を取りまくさまざまな現象に関して言及する。言語学の基本的な枠組みについても触れ、履修者の学習言語が何語であれ、その学習に役立つことを目標としている。	◎	◎	○	
世界の英語	英語の国際的普及は、地域の社会的要因に関連して多様化した様々な英語変種を生み出しました。英・米・カナダ・オーストラリア・ニュージーランドの各英語だけでなく、インド、シンガポール、タイ、マレーシア等のアジア諸国でも多様な英語変種が存在し、これらは World Englishes と複数形で呼ばれています。また、グローバル化の進展は、ビジネスや教育上の国際交流・協力の急速な拡大をもたらし、国際的な場において英語は、言語文化の異なる者同士の共通語、つまり a lingua franca として幅広く使用されています。 この授業では、英語変種について、歴史的、文化的背景に触れながら、その特徴を発音、文法・語彙を中心に概観すると同時に、国際共通語としての英語でのコミュニケーションの特徴	1. 国際的普及によって多様化した英語変種の地域的特徴についてまとめることができる。 2. 国際共通語としての英語でのコミュニケーションの特徴についてまとめることができる。 3. 上記1、2を踏まえ、グローバル社会における英語の役割と求められる英語コミュニケーション能力について考えをまとめることができる。	◎	◎	◎	○

	について、実際の事例研究を取り入れながら検討していきます。				
言語の理論 I	知識ゼロの人向けの言語科学の案内です。	- 「言語」についての世間にあふれた誤解を解く。 - 言語科学のそれぞれの分野への自分の向き・不向きの判断の材料を得る。		◎	
言語の理論 II	言語学の様々な分野を紹介します。言語データを様々な角度から分析する楽しさに触れていただければと思います。言語学の基礎知識を応用し、身の回りの言語現象について深く考えることが目的です。	理論言語学の諸分野を紹介します。各分野の基礎的な知識を身につけることを目標とします。また、言語学の複数分野の知識を応用し、実際の言語現象を分析できるようになることを目標とします。		◎	
社会言語学	社会言語学は文字通り「社会と言語の関係についての学問」ですが、この授業では、幅広い視野から社会言語学を概観し、言語的側面から歴史、社会、政治、そして日常生活を見直す考え方を身につけることを目標にしています。	世界中の様々な国に住む、様々な民族の言語状況に目を向け、その背後にある政治的・社会的・歴史的・民族的な要因を考える習慣を身につけてもらいたいと思います。それと同時に、自分の生活環境における言語的実情を自分で調べる「フィールド・ワーク」をする習慣を身につけてもらいたいと思います。		◎	△
応用言語学	Applied Linguistics の分野の中でも Language Acquisition の理論、特に第二言語習得を中心に扱います。言語習得の分野で、どのような研究がなされてきたか、また、言語習得の過程はどのようにして明らかにしていくのかを、授業、及び実験への参加を通して学びます。	こどもはどのように母語を獲得するのか、そして大人の第二言語習得と母語習得とはどのように異なるのか、そして習得理論はどのようにその違い、および類似点を説明してきたのかを学び、言語習得理論の知識を身につけることを目標とします。			

5. メディアコミュニケーション科目

科目名	到達目標	科目概要	DP1	DP2	DP3	DP4
<言語コミュニケーション>						
英語コミュニケーションⅠ (会話)	英語で円滑にインターアクションができる能力を伸ばし、SA 期間中に必要な社会言語的なスキルを修得する。	SA 参加への意識を高めるために、SA で想定される様々な生活場面での発話や会話のための準備学習を行う	◎		○	
英語コミュニケーションⅡ (表現)	英語 1~6 で修得した能力をベースに、SA 期間中自律的な言語学習のできる能力を養う。	毎週課されるホームワークに取り組むことで語彙力・情報収集/分析能力を高めつつ、授業においては、説得力のあるプレゼンテーションやライティングのスキルを養い、SA 期間中のアカデミック活動に備える。	◎		○	
英語コミュニケーションⅢ (留学会話)	英語コミュⅠで修得した能力やスキルをさらに発展させる。	SA に関連するアカデミックな会話テーマをより深く探求する。そのため、授業内での活動やディスカッションへの積極的な参加が一層要求される。	◎		○	
英語アプリケーション	SA 終了時まで修得してきた英語運用能力を、SA 後の 3~4 年次に幅広く応用し発展させる。	多様な教材内容により、様々なテーマについて深く探求考察する。例えば、学生同士の意見交換やディスカッション、プレゼンテーションといった形態で、英語表現の実践力を鍛える。	◎		○	
ドイツ語コミュニケーションⅠ、Ⅱ、Ⅲ	困難なくドイツ語圏で学生生活を送れることと、少しでも多く話せるようになる。聴解力・読解力・表現力における弱点を補強し、基礎を確実なもの、使えるものとする。	基礎文法を含むテキストを用い、ドイツ語圏の日常生活や文化のさまざまな場面に題材を求めた会話練習、聴きとり練習等と並行し、口語表現力を重視し、必要な分野の語彙の習得のための実践的な練習に取り組む。	◎	△	○	
ドイツ語アプリケーション ①②③	これまでの学習で伸ばしたドイツ語運用能力を維持・向上させる。ドイツ語圏の生活、文化、社会など多様なテーマに関する理解を深め、それらを簡単なドイツ語で表現・説明できる。抽象的なテーマについて、ドイツ語で自分の意見を述べ議論ができる。	テーマに沿って自由に議論する。グループワークも取り入れながら、できる限りドイツ語で表現し、ドイツ語で作文しながら少しずつ表現が自然に出てくるようになるまで練習するとともに、自分の意見をドイツ語にまとめる練習を行う。	◎	○	◎	
フランス語コミュニケーションⅠ（会話）	フランスの中で旅行および生活するために不可欠な基礎の知識を習得する。	フランス語コミュニケーションの力を発展させるクラス。フランス語会話を日常生活の中で使えるように土台をつくる。	○	△	◎	
フランス語コミュニケーション	教科書 Le Nouveau taxi! 1 を終え、学んだ表現を自分で	スタディ・アブロード・プログラムで予定されているアンジェ滞在	◎	△	○	

ヨ ン II (表 現)	使えるようになる。また、 簡単なテキストを読み、こ れまで覚えた内容を応用し ながらそれについて話すこ とができるようになる。	にむけて、必要な会話表現と基礎 文法を学ぶ授業です。教科書 Le Nouveau taxi! 1 を中心に進めます が、フランス語にある程度慣れて きたら、フランスの社会や歴史を 伝える簡単なテキストにも取り組 みます。				
フランス語コ ミュニケーシ ョン III (留学 会話)	前年度よりさらに会話のテ ーマを広げながら、フラン スで暮らせるために色々な 角度からコミュニケーション の力を強化させる。	フランス・アンジェへ行く前の直 前準備講座。基礎文法、必須な語 彙を復習する。	○	△	◎	
フランス語ア プリケーショ ン①	Ce cours permet à des étudiants assez confirmés (au moins 2 ans de pratique du français) de poursuivre leur apprentissage : amplification du vocabulaire, meilleures capacités de lecture et d'expression orale ou écrite. Il permet la préparation des examens du DELF (préparation directe à B1) comme des "kentei-shiken".	Ce cours s'adresse à des étudiants d'un niveau de français déjà confirmé. Les compétences de compréhension et de production à l'oral et à l'écrit seront travaillées afin d'améliorer le niveau de communication et d'expression. Les thèmes étudiés permettront aussi d'élargir les connaissances sur les cultures française et francophones.	○	○	◎	
フランス語ア プリケーショ ン②	Ce cours, suite du premier semestre, continue de s'adresser à des étudiants assez confirmés (au moins 2 ans de pratique du français) et motivés pour la poursuite de leur apprentissage : amplification du vocabulaire, meilleures capacités de lecture et d'expression orale ou écrite. Il permet la préparation des examens du DELF (préparation directe à B1) comme des "kentei-shiken".	Ce cours, suite du premier semestre, s'adresse à des étudiants d'un niveau de français déjà confirmé. Les compétences de compréhension et de production à l'oral et à l'écrit seront travaillées afin d'améliorer le niveau de communication et d'expression. Les thèmes étudiés permettront aussi d'élargir les connaissances sur les cultures française et francophones.	○	△	◎	
フランス語ア プリケーショ ン③	Ce cours s'adresse à des étudiants de niveau intermédiaire, motivés pour la poursuite de leur apprentissage : augmentation du vocabulaire, meilleure capacité d'expression orale (et même écrite), mise en place d'un véritable savoir-faire communicatif. Il peut préparer aux examens du DELF "B1" comme des "kentei-shiken".	Ce cours s'adresse à des étudiants d'un niveau de français intermédiaire. Les compétences de compréhension et de production à l'oral seront travaillées afin d'améliorer le niveau de communication et d'expression. Les thèmes étudiés permettront aussi d'élargir les connaissances sur la culture française.	○	△	◎	
フランス語ア プリケーショ ン④	学生は正確に発音できるよ うに練習し、悪い癖が定着 している場合は矯正・リハ	この授業は、正確で流暢な発音の 習得が目的です。フランス語圏の 人たちと楽しくコミュニケーショ	◎	△	○	

	ビリします（母音と子音の徹底的な訓練、日本人に苦手な B と V や R と L の音の判別、など）。そして、このフランス語の音の探求を活かすために、様々なコミュニケーションのなかで、練習定着させていきます。	ンをするのに必須です。オーラル・コミュニケーションに関心があり、習得した初歩フランス語をブラッシュアップしたい3年生以上を対象とします。				
ロシア語コミュニケーションⅠ	簡単なロシア語の質問を正しく理解し、答えることができる。簡単な言葉で自分のことを表現できる。文章を正確に読むことができる。	日常的に使われる会話表現の習得を目標とする授業です。ロシア語の発音とイントネーションに慣れることから始め、挨拶、受け答えの基礎から徐々に語彙を増やしていき、最小限の日常行動が可能となるような会話の基礎を作ります。また、講師との対話（会話）を通して、現地事情を感じてもらえるような授業を目指します。	○	○	◎	
ロシア語コミュニケーションⅡ	ロシアで学習、生活する上で必要な語彙を習得すること。ロシア語での質問を正確に理解し、それに適切に答えられること。自分の考えをロシア語で表現できること。	9月からの現地学習に備え、必要な会話力習得を目的とする授業です。1年次に学習したことを基に、また、会話表現に必要な事項を補いつつコミュニケーション力をつける練習を繰り返し行います。	○	○	◎	
ロシア語コミュニケーションⅢ	自分のことをロシア語で表現できる（話す、書く）、他のテーマについても簡単なロシア語を使って表現（話す、書く）できる。	現地での学習に備えるため、会話でよく使われる語彙や表現を身につけ、それをもとに相手に自分の考えを伝える訓練を行います。また、短いロシア語の文章を作成する練習も行います。さらに、テーマに沿ってロシアでの生活に関することを紹介していきます。	○	○	◎	
ロシア語アプリケーション①	春学期は、読解力と文法力をつけて、ロシア教育・科学省認定のロシア語検定（ТРКИ）および、ロシア語能力検定試験の、各自が希望する級の合格を目指します。	SAロシアで培ったロシア語の、とくに、読解力と文章力、文法の力を向上させ、ロシア語学習に対するモチベーションをいっそう高めること、ロシアの文化をロシア語の文献から読みとることが全体的な目標となります。この学習は、ロシア人との会話に際しても、引き出しをたくさん与えてくれるでしょう。	○	○	◎	
ロシア語アプリケーション②	読解力と文章力、リスニングを向上させ、ロシア語学習に対するモチベーションをいっそう高めること、	ロシア語アプリケーション①と同様に、引き続き、ロシア語の読解力を維持・向上させると同時に、リスニングに力を入れます。ロシ	○	○	◎	

	ロシアの文化をロシア語の文献から読みとる力をつけることが全体的な目標となります。	ア語を通して情報を迅速に的確に読み取り、記憶に刻むこと、またロシア語の音声を聴いて情報を正しく受け止める力を維持させていきましょう。次年度のロシア語検定試験（ТРКИ）、およびロシア語能力検定試験の希望する級の合格を目標に掲げます。				
中国語コミュニケーションⅠ	中国語コミュニケーションにとって必要不可欠な発音と基礎的な文法に関する知識と技能を身に付ける。	発音及び読解の練習を中心としつつ、徐々に習熟度を高めるよう授業を進める。	◎		○	
中国語コミュニケーションⅡ	初級後段階中級前段階の作文能力を身につけることを目標とする。	毎回、教員が提示した作文の練習問題を、既習の語彙・文法知識に基づいて完成させ提出する。また、提出し添削されたプリントを理解し、その後の作文に生かすために復習する。最終的にSA開始時の「宿題」に対応できるための基礎作りとする。	◎		○	
中国語コミュニケーションⅢ	一年次に習った内容を軸に、留学に必要な音読・訳読を行えるようにする。コミュニケーションが取れるスキルをアップする。表現力を身に付ける。	教科書に沿って、履修者のレベルを確認の上、内容への理解をチェックしながら、効果的に授業を進めていく。	◎		○	
中国語アプリケーション①②③④	“中国語を学ぶ”から“中国語で学ぶ”を目標に、文献や映像の翻訳、語法研究など、より高度な中国語力を身につける。	文献の翻訳やドラマの映像翻訳、中国語語法の研究など、授業ごとにテーマを決めて学習する	◎	○	○	
スペイン語コミュニケーションⅠ	1年次で学習する文法事項を使って、簡単な日常会話ができるようになる。また、正しいスペイン語の発音とイントネーションを習得することが目標である。	教員やクラスメートと日常の話題についてスペイン語で会話を行う実践的な科目である。	◎	○	○	
スペイン語コミュニケーションⅡ・Ⅲ	様々な状況におけるスペイン語での会話ができるようになることが目標である。さらに、会話における語彙を増やし豊かな表現力を身に着けることを目標とする。	教員やクラスメートと日常の話題についてスペイン語で会話を行う実践的な科目である。	◎	○	○	
スペイン語アプリケーション①②③④	バルセロナ留学中に身に着けたスペイン語力を保持あるいは向上させることが目標である。	教員やクラスメートと日常の話題についてスペイン語で会話を行う実践的な科目である。	◎	○	○	

	また、スペイン語検定（DELE）の受検を希望する受講者はその合格も目標となる。					
朝鮮語コミュニケーション Ⅰ	授業で学んだ文の読み書きができ、声に出して言えるほか、自分で文を作り出す力（＝言いたいことが言える力）をだんだんと身につけていくこと。	1セメの学習内容を理解しているという前提で、文法と語彙をさらに学び、複雑な表現ができるようにつとめる。	◎	○	○	
朝鮮語コミュニケーション Ⅱ	SAに行った時のために、ある程度の生活会話が可能になること。自分で考えてあらゆる場面で自然な表現ができるように、会話の力を導いていく。	「話す」「聞く」訓練を通して、自信を持って自然な朝鮮語の会話を身に付けていくことができることを目指す。今まで習った朝鮮語の力を、会話で様々な応用できるように、そのスキルを一層磨いていく。	◎	○	○	
朝鮮語コミュニケーション Ⅲ	SAに通用する語学力の習得、具体的には韓国外国語大「朝鮮語文化教育センター」の「3級」に編入できること。	1年次で学んだ文法と語彙の基礎の上に、「読む、書く、聞く、話す」の各能力を総合的に向上させる。	◎	○	○	
朝鮮語アプリケーション ①②③	朝鮮語のニュースや韓国の番組を字幕なしで理解できること。	既に持っている朝鮮語の知識を活用したり、もっと包括的に知識を吸収できることを目標とする。韓国の新聞、雑誌、映像などを使って、テキストには出ない、自然な朝鮮語の使い方や、多様な表現と新造語を学んで自ら表現できることを目指す。授業はできるだけ朝鮮語で進めていく。	◎	○	◎	
＜情報コミュニケーション＞						
情報コミュニケーションⅠ	文化情報学の基本主題の考え方、課題解決の手法、実践に必要な知識を実習を通して学ぶ。特に、本科目では「道具をもっと使いやすくデザインすること」と「新しい近未来の道具をデザインすること」、の2つのテーマについて実践的に学ぶ。 ・各テーマについて、その基本的な考え方、計画の立て方、実践方法を習得する。 ・テーマごとに成果発表の機会を設け、グループによる実験・調査データに基づく独自の改良案・コンセプト	この講義は、「道具を使いやすくデザインする方法論」と「新しい近未来の道具のデザイン」という2つのテーマに取り組む。具体的な手法の習得と実践の両方をバランスよく講義に配置してある。道具をデザインするという一見難しく思える課題を、具体的な課題に即して、実践的に学べる科目である。		◎	◎	◎

	ト案の提言を行い、レポートにまとめる。					
情報コミュニケーションⅡ	在外環境におけるネットワークの実践的スキルと問題解決方法や文化情報の調査研究の方法、情報編集ツールを学ぶことで、SAや卒業研究の成果発表に役立てる。	フィールドワークにおける異文化研究のため、文化情報の調査研究方法を習得する。インターネット環境を十全に活用し、学習成果を公開、蓄積する。			△	○
情報コミュニケーションⅢ	1. 作品制作を通じてコミュニケーションに必要な視覚表現の基礎的な事柄を学びます。加えて創作全般に通じるクリエイティブな造形表現や映像表現に必要な感覚や技術を養います。 2. 多くのアーティストやデザイナーに使用されている Adobe Illustrator、Photoshop、Premiere などクリエイティブ系ソフトのベーシックな使い方をマスターします。	現パソコンを使ってデザインやアートの作品制作をするための入門的かつ実験的な実習授業です。 絵を描くことなどに苦手意識のある人、パソコンでのイラストレーションや写真の加工、映像制作が初めての人にもわかりやすく、楽しく進めていきます。			◎	○
情報アプリケーションⅠ	ウェブページを記述する言語である HTML について理解し、自分でウェブページを作成できるようになる。 CSS を使って表現力の高いウェブページを作成できるようになる。 Javascript を使って動きのあるウェブページを作成できるようになる。 Three.js を使って 3D グラフィックスを使ったウェブページを作成できるようになる。 インターネット環境で応用力のある豊かな情報発信能力を身に着ける。	ウェブページを記述する HTML は近年新しいバージョンが作られ、その表現力が増している。本授業では最新の HTML5 をベースに、CSS や Javascript などを用いて表現力の高いウェブページを作るための技法について学ぶ。 最終的には HTML5 を使って簡単な 3D グラフィックスを表現する方法を学び、迷路のウェブページを構築できることをめざす				◎
情報アプリケーションⅡ	身近な情報サービスの一例として Web アプリケーションや地理位置情報を例に、広く使われている情報技術とリスクについて考え、自らの意見を構築する。議論を通して自らが調査し考えた「意見」を他の人に伝え	情報技術が社会基盤となり、広く一般に利活用される一方で、セキュリティや個人情報保護等の問題も広く認識されるようになってきた。この授業の前半では、身近に利用している情報サービスに対するリスクや問題について学習し、議論する。		◎	◎	◎

	<p>るためのプレゼンテーション方法を学び、実践・確認することで、客観性のある有為なプレゼンテーションができることを目指す。</p>	<p>授業の後半では議論を通じて調査し、理解を深めたことに関するプレゼンテーションの方法を学習し、実践する。</p>				
--	--	--	--	--	--	--

6. 専攻科目

科目名	到達目標	科目概要	DP1	DP2	DP3	DP4
<情報文化コース科目群>						
こころの科学	<ul style="list-style-type: none"> ・「こころ」の働きを情報の観点から捉えることによって何を明らかにすることができ、何をまだ説明できないのか、記憶、学習、問題解決、情動等を取り上げ、その働きの要点を説明できる。 ・「こころ」の働きを哲学の観点から考察することで、「こころとは何か」「こころとからだとの関係」はどのようなことになっているのかということについて説明できる。 	<p>「こころ」とはいったい何だろうか。私たちは、日常生活では特に「こころ」とは何かと問うことはほとんどない。というのも、私たちは「こころ」があること、あるいは「こころ」をもっていることをあらためて問う必要もないと考えているからだ。しかし、私たちは、「こころ」について何を知っているのだろうか。しかも、「こころ」があるとされている「からだ」のことも、私たちはどの程度知っているのだろうか。</p> <p>「こころ」への探求、さらには「こころと身体」との関係についての哲学的議論は、哲学が始まった当初から長い歴史を持っている。ある面では宗教もこの問題にかかわってきたとみてよい。その一方で、「こころ」の働きを「科学的に」解明しようとして、哲学から心理学が分かれてきたのは、ここ 100 年ほどの歴史しかない。また「こころと身体」との関係の理解については、相変わらず「心身二元論」の枠を出ていない。しかし今では「こころ」の探求については心理学だけでなく、言語学や情報学、脳科学など様々な角度からアプローチが試みられている。人工知能やロボットの分野では「こころを作ってみる」試みさえ出てきている。そこでは「こころ」の探求に関して、「身体」や身体を取り巻く「環境」との関係を視野に入れた研究が進められている。しかしそれでも、単一の領域からアプローチする方法では、「こころ」の本質に迫ることは難しい。近年では、「こころの科学」として、「こころ」を巡る様々な学問領域との関係を必要とする新しい学問が起こってきた。</p>		◎	◎	◎

		<p>「学際的科学」としての「こころの科学」では、専門分野の異なる二人の研究者が、情報学、哲学、認知心理学を機軸として、私たちの「こころ」を明らかにしようと試みる。特に、「こころ」の「働き」の中で、「認知」という「謎」に取り組み、「人間が認識する働き」、もしくは「知るという働き」を解明することが目指されている。また、「認知」については「身体」への眼差しが重視されていることも忘れてはならない。</p> <p>そこで本授業のテーマは、「こころ」のみならず、「こころと身体」との関係、「こころと環境との関係」についても視野に入れて、「こころ」の謎に迫ることにある。</p>				
ゲーム構築論	<p>コンピュータゲームのモノづくりを通じてコンピュータのソフトウェアがどのようにして動いているかを理解し、自分の力で簡単なソフトウェアを作り出すことができるような実践的な能力を身に着けることを目指す。</p> <p>現実世界のものをモデル化し、コンピュータでシミュレーションを行うことができる力を身に着ける。</p>	<p>この科目では、情報学を適用したモノづくりの面白さと難しさをコンピュータゲームのモノづくりを通して学ぶ。コンピュータにはワープロ、メールソフト、ウェブブラウザ、ゲームなどありとあらゆるソフトウェアがあり、我々は日々それらの他人が作成したソフトウェアを利用しているが、これらのソフトウェアが実際にどのようにして作られているかについて知っている人はあまりいないのが現状である。そのためコンピュータで何かを行う場合、他人の作成したソフトウェアを探して利用する必要があるが、そのようなソフトウェアが見つからなければあきらめるしかない。</p> <p>実際にはプログラミングを学ぶことで、簡単なソフトウェアであれば必要に応じて自分で作ることができるようになる。つまり、コンピュータのソフトウェアの消費者から、コンピュータのソフトウェアの生産者になることができるようになるのである。</p> <p>日常にあふれるコンピュータのソフトウェアはどのようにして作られているのか？本授業ではソフトウェアの中でも親しみやすいコ</p>				◎

		ンピュータゲームのプログラミングの観点から具体的な方法論を、実験実習を通じて学ぶ。				
ヒューマンインターフェイス論	道具をデザインする設計手法のうち人間中心設計の、基本的な理論から具体的な設計手順までを習得できる。 最後には、新しい道具・商品・サービスのデザイン案を、履修者ひとりひとりがユーザーセンタードデザインの設計手法を使って企画を提案できるようになる。	利用者が自らの意図通りに道具を使いこなせるようになって、初めて道具としての価値が生まれる。ところが、実際には使いこなすのに思った以上に苦労している。日常の道具をもっと使いやすい道具にできれば、日常生活はより豊かで快適なものとなる。その決め手は「ヒューマンインターフェイス」のデザインである。		◎	○	◎
情報セキュリティとプライバシー	普段利用している情報サービスに対するリスクや脅威を学習し、情報セキュリティやプライバシー保護に関する議論を通して基本的な情報管理技術を習得する。	PCやスマートフォンなど普段利用している個人の情報機器に必要な情報セキュリティ知識、および組織における情報セキュリティの方策等の理解を深める。			○	
バイオインフォマティクス(生物情報－いきものを理解する－)	講義では、生命活動における情報（主に遺伝情報）の特徴とその役割について、人間が作り出す言語を中心とした情報、及び、計算機が扱う情報と対比しつつ理解する。実習は、実際に行われている計算機を利用した生物学の手法を体験し、生物学の現状を理解する。	現代の生物学は情報科学的側面を強く持っています。ここでは、情報という視点からみた生命の実像を講義と実習を通じて学びます。	△	◎	○	◎
ネットワーク環境構築論	情報サービスを成り立たせているネットワーク技術、サーバ技術について演習を通して学習する。	Linuxの基礎的な操作方法とプログラミング言語（Perl）の基礎を習得し、Webサーバ等の構築方法やネットワークを通じた情報収集・解析手法を学ぶ。				○
文化情報空間論	人間と人工物の共生社会を視野におき、知的人工物が環境変化を感じ取り適応し、人間を知的支援するための諸技法を学べる。 さらに、私たちの暮らしを広げる知的生活空間デザインの基本的枠組みを理解できるようになる。	本講義では、知的人工物と人間との共生社会を視野において、まず「人工物の科学」について学び、「知的人工物との暮らしのデザイン」について学ぶ。		○	△	◎
コンピュータ音楽と音声情報処理	コンピュータ上で、音を生成する方法や、音の大きさ、長さ、音色、発音タイミングなどを制御する方法を習得し、サウンドプログラミングの基礎を身に着け	コンピュータの性能の急速な向上に伴い、コンピュータと人間を結ぶヒューマン・マシン・インターフェースの重要性が増し、人間の表現行為を工学的に扱う必要性が生じている。人間と機械のよりよ				◎

	る。 本講義では、サウンドプログラミング環境として Pure Data(Pd)のビジュアルプログラミング機能を利用する。パッチと呼ばれるプログラムの作成を通じて、コンピュータ音楽の製作を体験する。オープンソースソフトウェアとしての Pd の利点を認識し、Windows, Mac など OS や機器の違いに影響されない作品作り、電子楽器とコンピュータとの連携を構想できるようになる。	い協調をマルチメディア、特に音楽や音声などオーディオメディアにより実現したい。本講義では、情報デザインならびにメディア表現の上位科目として、コンピュータ上で音を扱う方法について学ぶ。サウンドプログラミング言語である Pure Data(Pd)のビジュアルプログラミング機能の使い、さまざまな音の表現方法を学ぶ。				
ハイパーテキスト論	現代社会におけるネットワークやコミュニティの在り方、人と人との繋がり方を各自が再考することを目指す。	新しい形のコミュニティや組織、シェアリング・エコノミー等の構造を検証しながら、これからの人の繋がり方をワークショップやディスカッションを通して考察していきます。		◎	○	△
情報編集論	受講者それぞれが、自身の考えを表現する際に、「情報の編集」を実践できることを目指します。	広告や製品、アート作品等の身のまわりある事例を考察していきながら、「情報の編集」ということを学んでいきます。		◎	○	○
文化情報の哲学	(1) ガタリの思想やテキストを学び、「新しいアナキズム」の思想や哲学を理解することで、「現実を生きるための哲学とは何か」という問いについて考えることができる。 (2) 21 世紀を生きる私たちにとって、「哲学する」ことがいかに重要であるかを学ぶことができる。 (3) 哲学的思考を身につけることができる。	本科目は、さまざまな文化の諸相を、「文化情報」という観点で捉え直しながら、哲学的な問題として検討することを目的とする。2017 年度は、現代の哲学者・アナキスト思想家フェリックス・ガタリ (Félix Guattari, 1930-1992) の思想を基本にして、20 世紀末から今日にかけて、国家権力の横暴に対して、様々な戦略で抵抗している「新しいアナキズム」の実際を哲学理論的に考察する。 それは、今という時代を生きる私たちが、高度に発達した資本主義と国家権力の癒着の中で、どのように生きることが望ましいのかという問題について、「国家ありき・資本主義ありき」という前提を問い直しながらも、私たちが生きる現実を踏まえて考えていくことを意味する。 また本科目は、秋学期科目「現代思想」と深い関係がある。「現		◎	◎	◎

		代思想」でも同様な問題意識に基づいて、別の角度から検討していく。それゆえ本科目と「現代思想」とを履修することで、現実を生きるための哲学の面白さを体験してもらうことも、大きなテーマになっている。				
情報デザイン	<p>講義では、情報を伝えるということについて、送り手と受け手の両方の立場を踏まえて多角的に検討します。</p> <p>課題制作に関しては講義を踏まえて、コンセプチュアルなこと（考えること）とプラクティカルなこと（手を動かすこと）の両方をバランスよく進められるよう、制作を進めてください。</p>	<p>情報デザインでは、視覚的に情報を伝えるためのアプローチを理論的かつ実践的に学びます。</p> <p>また、デザインワークにおいては、伝えるべき内容についてのコンテキストを作り手が十分に理解することが大切となります。そのための見方や考え方について学んでいきます。</p>		◎	◎	◎
<表象文化コース科目群>						
サブカルチャー論	イデオロギーや哲学の代わりにキャラクターやコピーが者を言う現代、政治も文化も素人が担い手になってゆく風潮を踏まえ、柔軟な批評精神を獲得し、サブカル全般に関する教養の底上げを測ると同時に、先人の斬新な発想の秘密に迫る。	サブカルチャーは振興の文化流行として、大衆文化や通俗趣味に分類されるが、表現者たちにより洗練が加えられ、いつしかメインカルチャーとなってゆく。文学、美術、音楽、漫画、映画、旅行、食文化、政治、科学あらゆるジャンルを横断し、文化流行全般を対象に、時代別の考察を通し、コミュニケーション能力の土台にもなる雑多な教養を身につける。映像をサンプルとして見せつつ、歴史的な背景を踏まえることで、各ジャンルの未来に体する提言を行う。		◎		△
マルチメディア表現法	写真表現、ポスター作り、DTP、映像制作などのマルチメディア実習を通じて、自らの発想を人に伝えるマルチメディア作品の形にすること、同じ課題で制作したお互いの作品を相互批評してセンスを磨くこと、作品をプレゼンテーションすること、これら課題制作の訓練を通じて作品作りの一貫したプロセスを身に着ける。	少人数ワークショップによるマルチメディア作品制作の実習。多様な種類のメディア情報をコンピュータで表現し、ネットワークマルチメディア環境においてわかりやすく統合的に提示する手法を学習する。画像、映像、音声など個々の編集技法の基本は既習のものとし、ここでの講義ではそれらの統合をコミュニケーションデザインの観点から学び、アイデアや表現意欲をコンテンツ制作に活かす効果的なオーサリングの戦略について考える。またワークショッ		◎	○	◎

		<p>プにおいては学習成果の体得をさらに確実にするために、ビデオ、Web マルチメディア、DTP などの領域から練習課題を適宜設定する。受講者には各人の嗜好にもとづき映像作品、音楽作品や DTP 作品などの個人プロジェクトを提案してもらい、セメスタを通じて制作してゆく。</p>				
メディア表現 ワークショップ 1	<p>みなさんは課題を通じて様々な表現活動に通じる取材・調査方法や様々なメディアを使った表現方法を学びます。</p> <p>各課題に取り組むにあたっては、自由な発想、臨機応変な対応が必要となります。柔軟な姿勢で（楽しんで）課題に取り組んでください。</p>	<p>表現活動のためのフィールドワークに関する実習授業です。各実習はワークショップ形式で行います。</p> <p>大学近隣を 3 つのテーマ（カメラを持って旅に出よう。スケッチブックに記録しよう。音を拾う。）でフィールドワークを行い、その成果をプレゼンテーションします。</p>		○	◎	
メディア表現 ワークショップ 2	<p>半期の授業を通じ、受講生は表現意欲や批評意識を刺激されるだろう。自己を語るコトバ、他者とのコミュニケーション能力を磨き上げるには、創作を実践することがショートカットになる。創作のエクササイズを重ねれば、説得力のある企画書の書き方、他者の関心を誘うプレゼンテーションの仕方も自ずと身につけられる。学生はそのスキルの獲得を目指し、課題をこなすこと。</p>	<p>書くことと読むことは表裏一体だが、閣技術の研究を通し、読み巧者になる手もある。実例を挙げつつ、実作者の立場から小説、エッセイ等の書き方 ABC を伝授する。メールから企画書、報告書、論文、創作、これら全ては特定のセオリーに基づいているので、これらを踏まえつつ、説得力や感動を与える手法に触れ、眠っている才能を引き出す。</p>	△			◎
五感共生論	<p>受講者各自が各種事例の考察を行いながら、人の五感の相互関係を再認識すること。</p> <p>・受講者各自が自身の課題制作内容と他の受講者の発表内容を比較検証し、感覚に基づく表現の多様性を再確認すること。</p>	<p>感覚にまつわる事例の考察や受講者自身による課題制作を通して、人の感覚の再認識を受講者それぞれが体験していくことを目的としています。</p>		◎	○	△
演劇論	<p>近代西洋演劇と対比した、日本古典演劇の特徴を理解する。</p>	<p>この授業では日本の古典演劇と近代西洋演劇との比較を軸に、演劇を構成する様々な要素、演劇を取</p>		◎	△	

	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な演劇理論を理解し、実作品の分析に応用できるようになる。 ・時代や文化、ジャンルを異にする多様な演劇作品の比較分析ができるようになる 	<p>り巻く様々な問題について考察します。その中で世界の演劇の多様なあり方や、基本的な演劇理論の応用を学ぶことにもなるでしょう。「なぜ我々／自分は演劇を見るのか」。様々な切り口から演劇を分析しながら、学生の一人一人がこの問への答えを探っていくことになります。</p>				
空間デザイン論	<p>本講座は、デザインの制作技術を習得するのではなく、空間デザインを操るリテラシーを高めることを目標に、空間が背負う社会的・文化的背景や文脈を理解し、表現・伝達する力を養う。</p>	<p>都市、建築、デザイン、アートの領域で論じられている「空間」を多角的に理解し、それを表現・伝達するデザインの方法論を学ぶ。</p>	△	○	◎	△
比較表象文化論	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンル・時代・言語等を異にする文化の作品間の比較文化的な分析ができるようになる。 ・オリエンタリズム、ジェンダー、構造主義、ナラトロジー、文化人類学、演劇記号論などの理論を理解し、作品分析に応用できるようになる 	<p>この授業では、「日本的」とされている様々な文化現象を、歴史軸に沿って、そして異文化との比較を通じて検証します。また文化について考えるにあたって我々を助けてくれるいくつかの理論を取りあげ、応用を通じてその理解を深めます。</p>		◎	◎	
パフォーマンス・スタディーズ	<p>(1) アートについて、既成の価値観・マスメディアの流す価値観に対する、批判的視点を身につけることができる。</p> <p>(2) 自らの価値観を問い直し、新たに刷新するための表現手段を具体的に説明することができる。</p> <p>(3) 高校までの芸術教育や制度的なアート認識を新たに問い直し、自らの視点で「パフォーマンス」や、パフォーマンスを用いたアートについての鑑賞方法や参加方法について、説明できる。</p> <p>(4) アートの領域の内部で生じた、20世紀以降のさまざまな変遷を辿ることで、「前衛芸術」のあり方について、現在のパフォーマンス</p>	<p>本授業では、「パフォーマンス(performance)」概念を中心に、さまざまなアートの表現手段との関連させることで、政治的・社会的な文脈で「パフォーマンス」を取り上げていく。</p> <p>特に、ニューヨーク大学シェクナー教授で有名になった「パフォーマンス・スタディーズ(Performance Studies)」理論に基づいて「パフォーマンス・スタディーズ」の実際を検討する。2017年度は、「セクシュアリティとパフォーマンス・アート」というテーマで、主に女性アーティストが「パフォーマンス・アート」の手法を用いて、積極的に自らの性／アイデンティティを問題にしていることを取り上げる</p>		◎	◎	

	ス・アートのあり方を予測することができる (5) 「パフォーマンス・スタディーズ」の基本について学ぶことができる。					
現代美術論	<p>講義では、現代美術と同様に関連のある芸術分野についても扱います。現代美術を中心に、様々な芸術の分野における実験的なアプローチを検証し、俯瞰することで、それらの考え方、アイデアについての理解を深めます。</p> <p>みなさんには馴染みの薄い分野であると思いますので、最初に美術史や美術理論の基本的な知識を確認します。また、講義の間にワークショップ（感覚的、体験的に学ぶこと）を行い、より理解を深めていきます。</p>	<p>現代美術の理論と実践についての授業です。</p> <p>今日の現代美術の世界は、様々な分野の最先端の芸術（美術、建築、音楽、パフォーマンス、映像、詩など）が複雑に交差しながら形成されています。</p> <p>現代美術のコンテキストを、多文化・関係性・コミュニケーションなどをキーワードに読み解いていきます。</p>		◎	○	
＜言語文化コース科目群＞						
世界の中の日本文学	日本文学の世界のなかでの位置を追究する	日本文学がどのように世界各国（語）で受容され、変容しているのかを認識し、日本文学の在り方、本質を考える。	◎	◎	○	
世界の中の日本語	<p>日本文学のいくつかの作品（主に近代・現代）に出てくる文章を英語に翻訳しながら「世界の中の日本語」と「日本語の中の世界」を考える。実際の日本語のテキストを学生たちが翻訳する。</p> <p>その実習を通して、表現のことばとしての日本語の姿を浮きぼりにして、二十一世紀にふさわしい日本文学論を展開する。</p>	言葉のレベルで「日本と世界」を考えることができること。	◎	◎	○	
世界とつながる地域の歴史と文化	授業の進展につれ、長野県の中山間地域の飯田・下伊那にも、東京とはまた異なる歴史・文化・自然があり、固有の国際関係がある	この授業は2012年度から夏休みに長野県の飯田・下伊那地域で実施している「S J 国内研修」（S J = Study Japan）に参加する留学生・ボランティア補助員および希	△	◎	◎	○

	<p>ことが理解できるであろう。最終的には、「S J 国内研修」に際して探求すべき自分なりのテーマをみつけ、夏休み中の学習を経て研修</p> <p>本番につなげられるようにすることが目標である。</p> <p>「S J 国内研修」に参加せず、単なる一授業として受講することも可能だが、そうした受講者にとっては、飯田・下伊那を例に日本の多様性や多文化を考える視点を得ることが到達目標となる。そこで得られた視点やアプローチは、日本の他の地域を考える際にも有効に機能するであろう。</p>	<p>望する一般学生を主対象に、その事前学習用として開講されるものである。</p> <p>「S J 国内研修」とは、一般学生のS Aに相当するもので、地方の中山間地域での生活を体験することで、留学生にとってのS Aとも言えるこの日本を、東京からの発想とは別に、地方の視点でも考えうる目を養うことを趣旨としている。</p> <p>したがって、この授業の目標も、飯田・下伊那地域の歴史・社会・文化・民俗・自然などについて、一通りの前提知識を身につけることで、8日程度の「S J 国内研修」を有意義に送れるようにすることにある。国際文化学部の研修であることに鑑み、とりわけこの地域における国際化や異民族との関係に重点を置きながらみていく。</p>				
日英翻訳論	<p>日本文学の名作を英訳することによって、英作文をみがき、同時に翻訳という鏡に映った日本語の特徴を考える。英語と日本語の究極的な比較。</p>	<p>日本語と英語の本質を理解すること。</p>	◎	◎	○	
実践翻訳技法	<p>日本文学の代表的なテキストを英語に翻訳する。原文に忠実でありながらすぐれた英語の表現をめざす。</p>	<p>日本語と英語の本質を理解すること。</p>	◎	◎	○	
中国の文化 I	<p>マスメディアとは異なる視点で中国の生活文化を知り、現代中国社会への理解を深めることが目標である。</p>	<p>中国は歴史的、文化的に日本と関係の深い国である。しかし、マスメディアを通して報道される中国は政治経済に偏りすぎており、しかも表面的なものが多い。中国の一般庶民の日常生活や物の考え方について、文化人類学的な視点の現地調査を通じて蓄積されてきた知見を学ぶ。</p>		◎	○	
中国の文化 II	<p>「民族」をキーワードにして中国を読み解く力を養う。</p>	<p>中国文明は、多様な風土のなかでそれぞれ独自の歴史と文化を築いてきた諸民族と漢族との、古くからの交流によって形成されてきた。この授業では、民族の多様性を紹介するとともに、20世紀以降、国家統合を進めるなか、各少数民族社会において生じた変化を通して、中国における国家と民族</p>		◎	○	

		集団との関係、民族間関係、民族意識、民族文化の現状などを紹介する。				
中国の文化Ⅲ (日中文化交流史)	中国の人々の対日イメージがどのように変遷してきたのか、また、いかなる要因によって変化したかを歴史的に理解することにより、この隣国の人々とどのようにつきあっていくべきかについて、適切な判断ができる力を身につける。	二千年以上に及ぶ交流の中で、中国の人々は日本にどのようなイメージを持ってきたのか。各種文献や映像資料を通じて、古代から現在までの対日イメージの変遷を概観し、そこから何を学ぶことができるか考える。		◎	◎	△
中国の文化Ⅳ (中国語の構造)	<ul style="list-style-type: none"> ・初級中国語で学んだ文法項目を確実に定着させる。 ・既習の文法項目の応用的用法を身に付ける。 ・比較的難易度の高い中国語を適切に理解・表現できるようになる。 	本授業では、初級中国語の文法事項を復習しつつ、さらに詳しい説明・解説を交えながら、問題演習を通じて応用力の育成を図る。とりわけ、『ポイント学習 中国語初級〔改訂版〕』で学んだ文法項目を中心に、各項目の基本的用法を確認しつつ、より詳しい用法や発展的な内容を学び、その知識を応用した作文練習や翻訳練習を行うことで、様々な中国語文を適切に理解・表現できる力を養う。	◎	○		
中国の文化Ⅴ (中国語と日本語)	<ul style="list-style-type: none"> ・中国語／日本語学習者の誤用例の検討を通じて、その原因に関して自分なりに説明できる。 ・関連する論考や資料の講読を通じて日中両言語の文法的諸特徴を適切に理解する。 ・比較的難易度の高い中国語を適切に理解・表現できるようになる。 	本授業では、様々な誤用例（とりわけ、日本語母語話者による中国語の誤用例、および中国語母語話者による日本語の誤用例）にスポットをあて、なぜそのような誤用が起きるのか、どのような表現にすれば適切な中国語／日本語表現になるのかを的確に分析できる力を養う。また、日中対照研究的視点から中国語を見ることにより、普段何気なく使っている日本語の文法的特徴を考える視点も養う。	◎	○		
中国の文化Ⅵ (古典思想・文学)	<ul style="list-style-type: none"> ＊中国古典が現代まで読み継がれてきた経緯 ＊中国古典を現代語訳で読むときの注意点 ＊中国古典の背景となる当時の社会環境 以上の内容を学ぶことで、中国古典の基礎知識を身につけ、現代の日本社会をより深く理解するための比較対象として中国古典を活用できる力を身につけることを目指す。	この授業では、代表的な中国古典のうち『論語』『易経』『老子』『莊子』『孫子』を取り上げて、その内容を学んでいく。これら諸子百家の思想はしばしば独立ないし対立するものとして扱われるが、実際には古代社会の人々の精神文化の基層となるいくつかの論理を共有している。実際に古典を読み解いていく中で、そうした中国文化の基層的な論理が、二千年以上の時を越えて現代社会においても機能している事例を発見できるようにする。	○	◎	◎	

中国の文化Ⅶ (近代文学)	中国の近代文学について基礎的な知識を得る。 中国の近代がかかえていた問題について認識を深める。	中国の近代文学を素材として中国の文化について考察する。人間にとっての文学の意味とは何かを考える。		◎	◎	
中国の文化Ⅷ (現代文学)	現在もなお存在し続けている、中国の現代文学が抱えている問題を現中国政権建国以前から丁寧にたどってゆくことによって理解する。	中国の現代文学が背負わねばならなかった課題を講述する。 現代の中国をより深く認識するために、歴史的背景や社会的背景をふくめて考察を加える。		◎	◎	
中国の文化Ⅸ (俗文学)	中国の古代から近世に至る文化史を理解し、東アジアという広い視野から自文化を考え、説明できる力を身につける。	日本文化とは何かを考えるには、古来、日本文化に多大な影響を与えてきた中国文化への理解が不可欠である。 この講義では巨視的・微視的という二つの視点から中国文化史を通観する。 巨視的な視点からいえば、中国文化が東アジアの諸民族に及ぼした影響は計り知れない。表意と表音という二つの機能を備えた漢字の発明は、言語を異にする東アジアの諸民族に漢語という共通言語(Lingua Franca)を与え、それを基盤とする文明圏の成立と高度な精神的交流を可能にした。漢代以降、中国の国教となった儒教は、東アジアに倫理観にもとづく国際秩序と社会秩序を与え、サンスクリット語仏典の漢語への翻訳は東アジアに仏教という世界宗教を成立させた。紙や印刷術の発明は東アジアのみならず、世界の文化の発展と普及に革命的影響を及ぼした。 いっぽう微視的な視点からいえば、中国歴代の文学、とりわけ市井の人々の間で次々と生み出された俗文学は、東アジアに庶民の文学を生み出す契機を与えた。この授業でも取り上げる三国志演義や水滸伝などは、わが国の文学にも多大な影響を与えている。		◎	◎	△
中国の文化Ⅹ (歴史)	自己の関心に沿ってテーマを設定し、研究史を整理し問題点に着目する力を身につける。この作業を通じてレポートを作成し、近現代中国の社会文化について受	「余暇の誕生」をキーワードとして、大衆小説、映画、漫画、流行歌、旅行などの切り口から近現代中国の社会文化の諸相を解説する。「戦争、革命、反日、共産党一党独裁」といったイメージでと		◎	◎	

	講者独自の視点による理解をはかる。	えられがちな中国を、余暇とそれに付随する娯楽産業の発達から観察することで、国民生活の視点から近現代中国史を捉えなおす。				
朝鮮語圏の文化Ⅰ（朝鮮半島の文化史）	朝鮮半島に関する基礎知識を身につけることによって、その中の興味のある分野について、自分から引き続き勉強を続けていけるような土台を作ること。	朝鮮半島は日本にとって、地理的、歴史的にもっとも密接な関係をもつ地域のひとつであり、この授業では、朝鮮半島全般に関し、常識ともいえるべき基礎知識をひとつお身につける。		◎	◎	
朝鮮語圏の文化Ⅱ（朝鮮語の構造）	実践的な語学力をある程度もつであろう受講生が、その裏にある文法や語彙などの「ルール」を理解することで、ブローケンではないきちんとした語学力を身につけること。	朝鮮語を音声、文字、語彙、文法などさまざまな面から言語学的に観察することによって、朝鮮語の力を高めるのに（さらに言えば他の外国語を学ぶにあたって）役立つ知識を提供する。具体的には大学入試センター試験「朝鮮語」を解く一方で、必要に応じてプリントを配布しながら、上の内容について解説を進めていく。また日頃接する機会の少ない北朝鮮の言語、方言、古語にも触れる。	◎	○	◎	
アジアの伝統芸能	この授業を通じて、中国の伝統芸能の全体像とその代表的作品、技法などを体系的に理解することができる。また、それと併せて、映像資料を ICT を利用して効果的に活用し、表象文化を分析する手法を身につけることができる。	中国には「戯曲」と総称される 300 種あまりの伝統歌劇と「曲藝」と総称される 400 種ほどの語り物がある。こうした芸能を通じて、中国庶民の文芸世界を垣間見ようというのが本講義の目的である。中国の庶民が、どのような物語に笑い、怒り、涙したのかを、彼らの一番身近にあったメディアを通じて追体験していく。 授業では ICT を活用し、映像資料を通じて中国の伝統芸能とそこから生まれた音楽や映画などの世界を体験していく。		◎	◎	○
東南アジアの文化	言語文化コースの地域研究科目の一つとして東南アジアの文化を学ぶ。インドネシア、フィリピン、カンボジアの世界遺産の現状と、宗主国（オランダ、アメリカ、スペイン、フランス）の植民地政策とその歴史的な位置づけを検討する。	東南アジアの世界遺産をめぐる文化の政治学というテーマで講義を行う。ボロボドゥール、バリのブサキ寺院、フィリピン・イフガオ族の棚田、カンボジア・プレアビヘア寺院の現代における評価と歴史的経緯を検討する。	△	○	○	◎
アフロ・アジアの文化	日本人にとって意識の上で一番遠いと考えられる地域が「アフロ・アジア」地域である。これは北アフリカ	2011年の「アラブの春」以降、ガザ地区におけるハマスとイスラエルの戦闘、また先が見えないシリアのアサド支持派と反政府派との戦闘、さらにそのシリアお		◎	◎	

	<p>から中近東にまたがる地域のことである。</p> <p>本講では、以前のようにエジプトやメソポタミアといった古代文明から現代までという時間的（歴史的）な広がりや、西はモロッコから東はイランまでという空間的（地理的）な広がりの中でとらえるのではなく、主にユダヤ教・キリスト教・イスラームという精神的（宗教的）な面からのアプローチを中心に考える。したがって、ユダヤ教・キリスト教・イスラームに関して、可能な限り現在の我々との関係に重点を置いて紹介したい。</p>	<p>よびイラクのシーア派政権に対抗して勢力を拡大する「アイシス（ISIS）」つまりイスラム国など、この地域で起こったまた起こりつつある事態に対して、正確な知識を得て、この地域に関するメディア・リテラシーを高めることが目標である。</p>				
ロシア・中央アジアの文化	<p>ロシアと中央アジア諸国の歴史、文化、お互いの影響を分かり、その地域の現状を理解するという目標がある。</p>	<p>授業の目標はロシア語圏の歴史と現状に関する知識を拡大することである。前世紀90年代初めにソビエト社会主義共和国連邦が解体し、15の独立した国家が誕生した。その内の五カ国はいわゆる中央アジアの国々であった。それはウズベキスタン、タジキスタン、キルギスタン、トルクメニスタンとカザフスタンである。数百年にわたってロシア帝国、ソ連邦の部分であったその国々は千年以上の歴史をもち独特の文化をもたらした。シルク・ロードの北の部分であった同じ地域、似ている文化、共同の歴史をもってこの国々は独立してからどのように発展していくのか、それらの国々がかかえている重要な政治、社会、経済等の問題は何かであるのか、ロシアと日本を始め、他の外国との関係、交流はどう進んでいるのかを学ぶ。</p>	◎	◎	△	
ロシア・東欧の文化	<p>この授業は、受動的に講義を聴いたり映像を鑑賞するのではなく、多数の情報から自身の感想や見解を導き、教員が提起した問題に対して能動的に意見や主張を短時間のうちに適切な文章でまとめる力をレビューシートを通して養うことも</p>	<p>ロシアと東欧は、宗教、民族、イデオロギー、国家間の勢力均衡などの問題により、絶えず、支配被支配関係をさまざまなかたちで築いてきました。ソ連邦崩壊後、大方がEU加盟を果たした東欧諸国。今日、これらの国々に対しては、中欧、もしくは中東欧という呼称が定着しつつあります。東欧とい</p>	◎	◎	△	

	<p>目的としています。つねに問題意識や批判的観点を抱きながら、授業に臨んでほしいと思います。</p>	<p>う位置づけは、ロシア・ソ連との関係性、そして地理的・歴史的要因といった多面的な観点から考察される必要があるでしょう。</p> <p>この講義では、ロシアと東欧諸国、それぞれの民族的差異や特殊性を主に文化や風土、歴史を通して見る一方で、それぞれの関係性に焦点をあてる作業も行い、文化の相貌を確認すると同時に、ナショナリズムの問題を提起していきます。また、日本との交流のあり方も視野に含めつつ、話を進めていきます。テーマが大きいだけに、まとまった結論を提示することはしません。さまざまな情報から、国家や民族のありかた、複数の国家や民族が共生するとはどういうことなのか、学生みなさんに考えてほしいと思います。</p> <p>SAロシアに向かう予定の2年生は事前準備の一環として、必ず履修してください。</p>				
ドイツ語圏の文化Ⅰ	<p>日本の近代化に決定的な影響を及ぼした19世紀後半～20世紀前半のベルリン及びドイツ語圏、ヨーロッパ諸国と日本との関連を理解するとともに、様々な文化現象に対する批判的洞察能力、自分の考えを他人に伝える言語で表現できる能力を身に付ける。</p>	<p>ドイツ語圏のうち、ドイツとその首都であるベルリンを主に取り上げる。19世紀後半から20世紀前半のベルリンとその周辺都市の文化現象を、技術革新という側面に着目しながら概観する。</p>	△	◎		
ドイツ語圏の文化Ⅱ	<p>「ドイツ語圏文化」の多彩さを知る。「ドイツ的」とされるもの・ことについて再検討する。近代国民国家についての批判的な視座を得る。「文化」という言葉の奥深さを学ぶ。日本とドイツの交流史についての知見を深める。</p>	<p>毎回、教員が資料を用いて各テーマの内容を紹介します。学術書や文学作品などを扱う回は、該当箇所を輪読形式で読み進めます。また適宜テーマに関連した映像を見ることもあります。その後、受講者が気づいた点や疑問点を指摘したり、意見を述べるなどして、議論を深めていきます。授業の終わりには、リアクションペーパーを書いて、自分の考えを言語化していきます。</p>	○	◎	△	△
フランス語圏の文化Ⅰ（思想）	<p>現代のフランス思想の共同体論の流れを把握する。共同体論の背後にある戦後フランスの歴史を知る。配布資料と参考書の講読をつう</p>	<p>この講義では、「共同体」をテーマとして、フランス思想を学びます。20世紀末のソヴィエトの崩壊は、自由主義の共産主義にたいする勝利を決定づけたかに思われま</p>	○	◎	△	

	じて、授業で取り上げた人物や作品についての理解を深める。	した。しかし、近年になってかつての共産主義とは異なる仕方で、「共同体」を考え直す試みが広がりつつあります。英語圏に目を移せばコミュニタリズムと呼ばれる潮流があり、日本でも外来語をそのまま用いたコミュニティの再生が言われています。このような「共同体」にたいする多様な関心の高まりを視野に入れながら、本講義では現代のフランス思想の「共同体」論について考えます。とりわけ 20 世紀後半の時代に焦点を当て、この主題に取り組む論者たちを扱います。また、主題に関連する戦後フランスの歴史にも折にふれて立ち戻ります。				
フランス語圏の文化 II (芸術)	ルネサンス以降のフランス語圏の美術に関して、エポック・メイキングな芸術家や流派、作品の名前などを覚え、その歴史的意義や社会背景を説明できるようになる。あわせて、鑑賞力を養う。	近代フランスの絵画・写真・映画の歴史を概観し、芸術的・社会的な意義を理解する。	△	◎		
フランス語圏の文化 III (文学)	フランス語圏の文学の基礎知識を深める。 さまざまな仏文学潮流の代表的な作品の抜粋を読み、分析研究をする。十九世紀から非常に盛んになった大衆文学の研究も主に探偵・ミステリー小説を通して行う。	中世時代から現代にいたるまでのフランス語圏の文学の概説。	◎	○		
フランス語圏の文化 IV (複言語・複文化社会)	1) フランス語圏社会が複言語・複文化が共存する社会であることを具体的に知ること。 (2) 言及する各社会において、言語・文化の多様性がどのようにして維持されているのかを知ること。 (3) 言及する各社会において、在来言語・文化とフランス語・文化とが、どのような関係にあるのかを述べられるようになること。	世界5大陸に広がるフランス語圏(フランコフォニー)社会を「複言語・複文化社会」と捉えた上で、それぞれの社会において複数の言語・文化が、どのように共存しているのか、またはどのように軋轢が解消されているのかを論じる。 具体的には、カリブ海域諸島、カナダのケベック州、北アフリカ・マグレブ、サハラ以南アフリカ、フランス語圏ヨーロッパなどにおける言語・社会状況を解説することで、フランス語圏社会の普遍性と差異を提示する。	△	◎	○	
スペイン語圏の文化 I	スペインの歴史と文化全般を取り上げ、受講生が更に	スペイン文化の多様性を知ることを糸口に、文化や社会の多様性の	△	○	◎	◎

	<p>スペイン語学習のモチベーションを高めることを目的とする。</p> <p>スペインの地域と文化の多様性をより深く理解し、自分なりのスペイン像を描けるようになることが目標である。</p>	<p>あり方について考え理解を深めることを目的とする。</p> <p>受講者は、各自の興味・関心に基づきテーマを選び、そのことについて授業内でプレゼンテーションを行う。</p>				
スペイン語圏の文化Ⅱ	<p>ラテンアメリカに関する記事やニュースをより深く理解し、自分なりの意見を述べられるようになる。</p>	<p>スペイン語圏の自然や歴史、文化全般に渡って受講生が幅広く興味と知識を得て、更にスペイン語学習のモチベーションを高めることを目的とする。</p> <p>受講者は、各自の興味・関心に基づきテーマを選び、そのことについて授業内でプレゼンテーションを行う。</p>	△	○	◎	◎
カタルーニャの文化Ⅰ（言語A）	<p>簡単なカタルーニャ語会話ができるようになる。</p> <p>ラテン語からカタルーニャ語がいかにかきたかという歴史を知る。</p> <p>スペイン語、カタルーニャ語の二言語社会の実情を知る。</p>	<p>スペイン語を使ってカタルーニャ語の文法について解説する。</p> <p>カタルーニャ語の会話の練習をする。</p> <p>スペイン語でカタルーニャ語の歴史、二言語社会カタルーニャの現状を説明する。</p> <p>S A スペイン修了程度のスペイン語力が必要。</p>	◎	◎	○	
カタルーニャの文化Ⅱ（言語B）	<p>簡単なカタルーニャ語会話ができるようになる。</p> <p>ラテン語からカタルーニャ語がいかにかきたかという歴史を知る。</p> <p>スペイン語、カタルーニャ語の二言語社会の実情を知る。</p>	<p>スペイン語を使ってカタルーニャ語の文法について解説する。</p> <p>カタルーニャ語の会話の練習をする。</p> <p>スペイン語でカタルーニャ語の歴史、二言語社会カタルーニャの現状を説明する。</p> <p>S A スペイン修了程度のスペイン語力が必要。</p>	◎	◎	○	
カタルーニャの文化Ⅲ（歴史・社会A）	<p>食文化、ワインの文化、民族舞踊、民謡...カタルーニャ文化の魅力に関する知識を身に付ける。</p>	<p>カタルーニャ文化に関する画像、映像を見ながらスペイン語で解説する。</p> <p>S A スペイン修了程度のスペイン語力が必要。</p>	◎	◎	○	
カタルーニャの文化Ⅳ（歴史・社会B）	<p>カタルーニャの現在についての知識を身に付ける。</p>	<p>カタルーニャに関するスペイン語の新聞記事を読みながら、カタルーニャの現在について解説する。</p> <p>S A スペイン修了程度のスペイン語力が必要。</p>	◎	◎	○	
英語圏の文化Ⅰ（文化史）	<p>(1)16世紀末～17世紀初めの所謂ルネサンス期のイギリス演劇(特に William Shakespeare の劇)を時代の移り変わりに関連させて把握</p>	<p>時代の変革期における大衆文化を通して見たイギリス社会を学ぶ。</p>	△	◎		

	できるようになること, (2) ルネサンス期のイギリス演劇のみならず, 時代の変革期における大衆文化と社会を関連づけて考えられるようになること, (3) 英文で書かれた論考を自分なりに読み解いて, さらにそれを批評することができるようになること.				
英語圏の文化 II (思想史) (History of Western Thought)	The primary goal of this course is to give students the basic knowledge necessary to understand: 1) how societies and cultures change in general and 2) how the cultures of the English-Speaking World developed their unique forms.	The course starts out by outlining the forces behind cultural change. This is followed by lectures discussing the development of European political and religious institutions following the Ancient Greco-Roman era. We then attempt to analyze Britain's rather unique political & economic institutions at the beginning of the modern era as a product of cultural change, i.e., the changes in thought.	◎	△	△
英語圏の文 III	<ul style="list-style-type: none"> ・旧植民地地域について学び、現代の国際状況の理解につなげる。 ・旧植民地地域の歴史を振り返り、その主体性を重んじながら、西洋の視点から語られる「世界史」に対する別様の視点を身につける。 ・東西の対立という観点から説明され、理解されがちな冷戦を、旧植民地地域の経験から再考する。 	英語圏世界とは、むろんイギリスや北米だけではなく、世界中に広がるイギリスの統治地域や植民地を多く含みこむ。したがって、英語圏世界について学ぶことは、多くの場合、旧植民地地域について学ぶことでもある。そのためにもこの授業では、かつて「第三世界」あるいは「南」と呼ばれた旧植民地地域の歴史的な軌跡を概観して、「世界史」を異なる視座から学び、ひいては「英語圏」という枠組を再考することを目的とする。	△	◎	○
英語圏の文化 IV	受講生は、アメリカの文学および文化について基本的な知識を身につける。また、それぞれの文学作品の内容を知るとともに、そこで描かれているアメリカ社会、文化、宗教、エスニシティ等の諸相を歴史的な視座から考察するための素地を身につける。	アメリカの文学をアメリカ社会や文化のさまざまな諸相と関連づけて考察する。各時代における文学作品の描写や問題提起が、時には時代を超えながら、アメリカの映画、音楽、その他のポピュラーカルチャーとどのようにつながりうるのかを考える	△	◎	
英語圏の文化 V	英語で書かれた文学作品を分析することで、英語圏の社会・歴史・文化に関する知識を深める。加えて、さまざまな背景を持った英語圏の作品を扱うことで文化	英語圏、特にアイルランド、イギリスで書かれた作品を性格描写、風景描写、物語の展開、文体などを仔細に検討しながら、作品の歴史的・社会的・文化的な背景に対する理解を深める。	◎	◎	○ △

	を相対的にみる視点も併せて涵養する。				
英語圏の文化 VI	単に物語を追うのではなく、小説全体の構造と細部を同時に読み取ることができるようになる。作品と作者の文学史における位置づけを理解する。 19世紀末のさまざまな「不安」がどのように表象されているか理解する。 イギリス小説を英語でも読めるようにする。	19世紀から20世紀の変わり目に特有の「不安」——ダーウィニズムが生み出した先祖返りの不安、退化幻想、そして植民地から本国、野蛮から文明への逆侵略の恐怖——にとりつかれた、世紀末のイギリス小説を読む。	△	◎	
英語圏の文化 VII	1. 音声・文法面等の構造の知識を得る。 2. 英語の構造の研究の仕方について、ある程度の知識を得る。 3. 英語 に関しての様々な問に対して、答えるべき道筋がつけられる。 4. 英語・英語文化圏の知識を深める。	現代英語の構造について、様々な面から考察する。良きにつけ悪きにつけ国際語になっている英語は、どのような言語なのか考察する。	◎	◎	○
英語圏の文化 VIII	1. 英語の歴史について、ひと通りの知識を得る。 2. 英語の歴史に興味を持ち、現代英語の様々な事象について、歴史的な説明を試みる。 3. 言語の歴史研究について、その大まかな方法論を知る。 4. 英語の運用力をつける。	本来は大陸のゲルマンの部族の言語であった言語がブリテン島に入り英語になってから、どのような変化を遂げて今のような国際的な言語となっていったか学ぶ。	◎	◎	○
Structure of English	1. To get a general idea about how English sounds and grammatical phenomena are described. 2. To obtain a certain level of knowledge about how various structural aspects of modern English SHOULD be described. 3. To obtain enough knowledge about modern English so as to answer various questions about the alleged 'mysteries' of the English language. 4. To study English in its general sense.	To consider structural aspects of the English language, which has become the de facto 'global' language.	◎	◎	○

History of English	<p>1. To get a general idea how the English language has evolved,</p> <p>2. To try to explain various apparent 'mysteries' of English in historical terms,</p> <p>3. To begin to develop a general theory of linguistic change,</p> <p>4. To study English in its general sense.</p>	To study the history of the English language, which, good or bad, has become an 'international language' in our modern world; and to develop a general interest in the language itself through doing a lot of reading.	◎	◎	○	
<国際社会コース科目群>						
実践社会調査法	<p>(1) 統計的な社会調査データの読み取りができる</p> <p>(2) 質的調査(観察、ドキュメント分析、ライフストーリー調査)を実践できる</p> <p>(3) 研究発表の方法を理解・実践できる</p>	質的社会調査の実践と量的社会調査の原則を学ぶことで卒業研究などで活かせるようになることを目指す。なお、量的社会調査については原則を学ぶに留め実践は行わない。	○	◎	◎	○
実践国際協力	<p>(1) 国際開発協力の理解に必要な概念を理解し説明できるようになる。</p> <p>(2) 国際開発協力の実践課題を学問的な問いに関係付けられるようになる。</p> <p>(3) グループ討議の意義を理解する。</p>	大学教育で「実践」から学ぶことには2つの意義があると考えられる。1つは体系立った学習の応用として、もう1つは新たに学習すべき領域を見つけるためである。この授業では後者を主たる目的とする。テーマは「国際開発協力」を中心的に取り上げる。国際開発協力の実践例を通して、国際社会の理解につながる思いもよらぬ学問分野の大切さを発見し、更なる学習と探求の端緒となるようにする	○	◎	◎	○
国際関係研究 1	<p>(1) 授業で扱う非国家アクターが「国際関係」にどのような影響を及ぼしているかを説明できる。</p> <p>(2) 「国際関係」に関わる事件や問題が生じたとき、理論的に現象を説明することができる。</p> <p>(3) 関連する文献の趣旨を正しく読み取ることができる。</p>	本授業ではアクター(行為の主体)に着目して「国際関係」を学ぶ。「国際関係」を国家の関係のみで語ることは困難であり、NGO、国際組織、民間助成団体、民間企業を主な考察の対象とし、国家の枠組みとは異なる視点から国際社会で生じている諸問題について考える。そのために必要な理論を習得するとともに、それを通して培った分析力を応用する意義を理解することを目指す。	○	◎	◎	○
他者イメージ論	人間の自己認識の中心は「他者」をどのように位置付けるかという問題と不可欠である。サイードのオリエンタリズム論を手掛かりに、文化人類学、植民地政策学などのなかで、「他者」がどのように形成さ	<p>① 博物館の歴史をリンネによる博物学の体系化との関連性から検討する。</p> <p>② 19世紀半ばから始まった博覧会の歴史的発展を跡付け、進化論と他者イメージの結びつきを検討する。</p> <p>③ 1931年のパリ植民地博覧</p>		○	◎	

	れ、現代のわれわれの認識を決定しているかを検討する。	会におけるフランス館とオランダ館の詳細を検討し、植民地支配と進化論、人種主義、他者イメージを検討する。 ④ オランダ館の中心であったバリ島のイメージ形成を詳細に検討する。				
宗教社会論Ⅱ (キリスト教と社会運動)	1. 近現代のキリスト教に基づく社会運動を考える上で、重要な基本概念や理論について理解できるようになる。 2. 宗教と社会運動の関係を、社会思想や歴史意識の視点から分析できるようになる。 3. キリスト教に基づく社会運動に関する簡単な史料分析を行えるようになる。	キリスト教は様々な社会思想と結びつきながら、近現代社会における諸問題に対する改革運動を、世界各地で展開してきました。この授業では社会思想史・社会運動史の立場から、19世紀以降におけるキリスト教を基盤とする社会運動が、近現代社会における諸問題(労働問題・人種差別・貧困・ジェンダー問題・植民地主義など)をどのように捉えたのか、そして新たな社会思想(進化論、社会主義、フェミニズム、など)とどのように関わりをもっていたのかについて議論していきます。		◎	○	
間文化性研究 翻訳論	翻訳についての基本的学術用語を理解する。 翻訳の原理と可能性・限界を知る。 私たちが日常的に行っている他言語テキストの翻訳について、学術的概念をあてはめて理解する。	翻訳の基本概念を概説する。順次導入する概念、ターミノロジーを用いつつ、実例分析を行なう。日本語、英語以外のテキスト実例は、学生による分析に付する。学生による分析レポート提出、そのプレゼンテーションも随時行なう。	○	◎	◎	○
国際関係研究 2	(1)「国際関係」に「地域研究」の視点を応用できる。 (2)「開発と環境」に係る「国際関係」を分析する際に有用な学問的な理論や概念を理解し説明できる。 (3)東南アジア半島部の「国際関係」を論じた英語論文を適切に理解できる。	本授業では東南アジア半島部のメコン河流域国という「地域」に着目して「国際関係」を学ぶ。特に「開発と環境」をテーマにすることで、社会科学と自然科学の融合的な視点を身につけることを目指す。なお、本授業では環境を自然環境と社会(生活)環境の両者を含む概念として捉える。	◎	◎	◎	○
移民研究Ⅰ	移民に対する理解を深め、異文化理解の重要性、多文化社会が抱える課題とそれらへの取り組みについて考える力・態度を修得する。	今日、国境を越えて多くの人々が移動し、移民を取り巻く課題は、ますます重要性を帯びてきている。本講義では、世界の移民の中で最大多数を占める華人(華僑)を事例に、華人について総合的に学習する。具体的には、華人の歴史的背景、日本・北アメリカ・ヨーロッパ・東南アジアなど世界各地における華人社会の地域的な特色、そして海外の華人と中国との		◎	○	

		相互関係などについての課題を取り上げる。				
移民研究Ⅱ (朝鮮民族の ディアスポ ラ)	<ul style="list-style-type: none"> ・各地に暮らす朝鮮民族について、その形成の歴史や現状の概略を理解する。 ・それらをもとに、朝鮮民族のディアスポラ（離散）全体について考察する。 ・朝鮮民族の事例を普遍化し、移民や多民族共生全般について考える契機をつかむ。 ・とりわけ私たちの住む日本における移民や多民族共生について、具体性を伴って考えられるようにする。 	<p>朝鮮民族のディアスポラ（離散）について考察する。</p> <p>我々の暮らす日本社会には、「在日韓国人」「在日朝鮮人」「在日コリアン」などと呼ばれる韓国・朝鮮系の人々が大勢住んでいるが、同様の現象は中国・旧ソ連・アメリカなど、世界各地で見られる。これらの人々が朝鮮半島を離れ、各地に移住した歴史やその後の変化、とくに現地社会での他民族との衝突や共生の営みを、各種の研究成果や私自身の見聞をもとに講義する。</p> <p>朝鮮民族の移動と定着という個別のテーマを探究することを通して、移民現象や移住地での多文化共生・文化の変容という、世界に普遍的にみられる現象への理解につながるよう努めたい。</p>	△	◎	◎	○
移民研究Ⅲ	人の移動を通じた国際社会と地域社会の形成、異文化集団間の関係について、歴史と現状を学ぶ。	沖縄からの移民の歴史と現状を、移民先社会での沖縄文化とアイデンティティーの形成、他民族集団との関係などについて、アジア及び太平洋島嶼における事例を中心に学ぶ。		◎	◎	
地域紛争とエスニシティ	<p>① 国民国家と暴力という観点から授業を行う。</p> <p>② 国家と暴力という問題を、インドネシア国家の成立を事例に検討する。</p> <p>③ オランダ植民地時代における領域の画定とそれに伴う紛争＝戦争の事例を歴史的に検討する。</p> <p>④ インドネシア独立運動における、言語、国民意識の形成をナショナリズムとの関連性で学ぶ。</p> <p>⑤ 戦後の国家形成のなかで、スハルト時代の開発政策と地域紛争の事例を学ぶ。</p>	暴力装置としての国家の在り方を、植民地時代の領域確定のための資源収奪政策と、現代における開発政策に伴う中央国家による資源収奪政策との類似性を指摘し、ポストコロニアリズム論の観点から、国家と暴力の問題を論じる。		○	◎	
持続可能な社会	人間が本来その一部であるはずの生物についても理解し、生物多様性について説明が出来る。その上で国家を超えた国際社会を捉え直すことが出来る。	ここでは生物多様性にもとづいて、持続可能な社会作りについて考えたい。	○	◎	○	◎

地域協力・統合	時事問題として取り上げられることの多い地域統合の問題を、より長期的な視野において考える姿勢を身につける。	思想・運動・制度としてのヨーロッパの歴史を学ぶ。	○	◎	◎	○
<演習>						
情報文化演習・表象文化演習・言語文化演習・国際社会演習	<p>(ア) 語学力や ICT のリテラシーを用い、演習での活動に係る先行研究を検索し、文献リストを作成することができる。</p> <p>(イ) 文章の執筆や作品の制作にあたり、剽窃の禁止や著作権の尊重など基本的な学術ルールがあることを理解し、実践することができる。</p> <p>(ウ) 受験勉強や資格試験のための勉強と、先行研究を踏まえた自律的な研究の違いについて、みずからの考えを述べることができる。</p>	演習とは、それまでの学習である程度の知識を身に付けた学生が、少人数指導の環境の下、みずからの専門性をさらに深める場である。	◎	◎	◎	◎
<インターンシップ>						
インターンシップ事前学習	国際文化学部に関連する企業・団体の第一線で活躍されている外部講師による講義であり、その業界の特徴、問題などを学ぶほか、実社会で生きることとはどういうことかを最新のデータを交えて学ぶことです。	<p>「国際文化学部に関心のある企業／団体の第一人者によるプロフェッショナルな仕事案内」を目的としています。</p> <p>この科目は複数の外部講師が担当するオムニバス授業です。国際文化学部を卒業してどのような仕事に就けるのか、というのは多くの学生の皆さんが不安に思っている事案です。国際文化学部を卒業して必ず有利になる職種はありませんが、いくつかの業界は国際文化学部との親和性が非常に大きいものがあります。そうした業界の第一線で働く経験豊富な講師をお招きして、それぞれの業界、企業の仕事の内容と将来展望を直接話していただく機会を提供するのがこの授業の目的です。また、卒業生による就活体験、就業体験のお話を聞く時間も作っています。</p> <p>この授業を取ることによって、国際文化学部と親和性の高い企業・機関に関する生の情報を収集し、「インターンシップ」という</p>		○	○	○

		就業体験、就活などに生かすことができます。				
社会貢献・課題解決教育	<p>東京都台東区内（上野、浅草、カチクラ等）の中小企業、商店街（クライアント）の経営課題の解決に取り組むクライアントを笑顔にする具体的な成果をあげること、そして、それを通して下記のスキルや知識を身につけること、以上2つが、授業の到達目標です。本授業に参加した学生が身につけるべき能力は、以下の5点です。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 問題を発見する力＜発見＞ 2. 問題を分析し解決策を提案する力＜分析＞ 3. 解決策を実践する力＜実践＞ 4. コミュニケーションとチームマネジメントの力 5. プレゼンテーションの力 	<p>本授業は、学生自身が中小企業、商店街のコンサルティング（問題解決）に実際に取り組むプロジェクト型授業です。複数学部、学年の学生が履修可能な公開授業です。社会で必要とされる、問題発見・解決能力、コミュニケーションとチームマネジメントの能力、プレゼンテーションの能力などが身につきます。</p>		○	○	○
卒業研究	<p>（ア）論文の執筆や作品の制作に際して扱う主題について、先行研究を読み込み、文章に要約することができる。</p> <p>（イ）学術的に意味のある研究テーマとは何かという問題について、みずからの考えを述べることができる。</p> <p>（ウ）みずから設定した研究テーマが、既に身に付けた語学力やICTのリテラシーで達成可能かという問題について分析する力を持っている。</p>	<p>卒業研究とは、学部での学びの集大成であり、学術的に意味のあるテーマをみずから設定し、自律的な研究を展開しうることを証明するための場である。</p>	◎	◎	◎	◎

6. 自由科目

自由科目は、「総合科目」「他学部公開科目」「グローバル・オープン科目」「ESOP 科目」「ERP 科目」「短期語学研修」「国際ボランティア」「国際インターンシップ」の諸科目から構成されます。それぞれ担当部署のカリキュラム・マップをご参照ください。